

目次

まえがき	・	1
写真あれこれ 〈水野忠明氏の写真講座に出席して〉	・ ・ ・ ・ ・	2
花嫁の父	・ ・ ・ ・ ・	8

島を訪れた人

・
・
・
・
・

15

傘はなくても雨は降る

・
・
・
・
・

22

酒をめぐる断想

・
・
・
・
・

30

黄昏

・
・
・
・
・

37

海の光

・
・
・
・
・

44

つるんしゃん

・
・
・
・
・

52

空席の灯

・
・
・
・
・

58

灯りに想う

・
・
・
・
・

66

最期の演奏

・
・
・
・
・

73

•
•
•
•
•

.....

.....

.....

•
•
•
•
•

.....

•
•
•
•
•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

80

88

97

102

109

116

123

130

137

追想

寒椿

マニラ湾の夕日

別れの篠笛

あとがき

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・

まえがき

この小冊子は、父、木寺諭吉が、長崎県松浦市福島町（旧北松浦郡福島町）発行の「文教いろは」に投稿させて頂いた随想を一つにまとめたものです。

退職してからの父は悠々自適の生活を送っておりましたが、その間に自分の心境や思い出を語っております。三人の息子達は、父が体調を悪くするまでこのような随想にほとんど関心がなかったというのが実情ですが、体調を崩した頃からか、このような文章があることを母に教えてもらい、目を通すようになりました。

父の若い頃の思い出や老いを迎えた頃の心境が記されており、私どもにとっては、貴重な資料となっております。父は、平成二十六年四月二十四日帰らぬ人となつてしまいましたが、父が生きた証の一つとして、この小冊子が家族、親族の手元に残ればという思いでまとめました。

なお、この冊子に掲載の写真は、直接に文章と関係はありませんが、父や父の家族、親族およびご友人の皆様の写真を思い出として挿入致しました。

不備、不適切な表現、不適切な写真等があれば、ご指摘をお願い申し上げます。

長男 木寺 佐和記

写真あれこれ

〈水野忠明氏の写真講座に出席して〉

空はなぜ青い、夕陽が赤いのはどうしてか、遠くの山が青く見えるのはなぜだろうで、始まった水野さんの写真講座は、私の意表を突いて、本格的な基礎理論からスタートした。

写真暦四十年の私の自負心は、いとも簡単に打ち砕かれ、柔順な生徒にされてしまった。見事なプロの感覚と自信、そして的確な指導に私は完全に降参した。

水野さんの若い頃の一枚の作品を見て、深い感動を覚え、思わず「私に譲って下さい」と声がでかかったが、ぐつとこらえた。プロとアマの違いは、囲碁でも痛い目にあい、ここ三年碁石を握ることもない私である。写真で又プロのすごさを見せられ、意気消沈してしまった。

気を取り直し前の作品を引っ張り出し眺めて見た。どれを見ても写真にはなっていないのである。昭和五十二年平戸大橋の竣工の際、私は朝夕三百枚近く写真を撮り続けたことがある。できた写真を田平在住の写真家に見せたら、全く批評をしてもらえなかった。最後に「写ってはいるですね」の一言であった。

一枚の写真を撮影するため、一年余りも通い続け、シャッターチャンスを待ったという水野さん、土の中の昆虫の生態を撮るため、ウンボーを一ヶ月近く借りた写真家の例などは、プロ独自のものだと思うが、その気迫だけは学びたいものである。水野さんが福島は写真になる風景が少ないとこぼされた。それにしても数少ない場所から私の想像もつかない点を選び、撮られた作品のすばらしさ、観察力の確かさは、アマの到底及ばないものであった。

話を聞くだけで、写真が総合芸術だといわれる理由が、なんとなくわかるような気になる、プロの迫力ある講座であった。

福島へ帰郷する度に私を誘い、展望台に日の出の撮影に行く知人がいる。撮ったフィルムは百本近くなると思うが、できた作品は一度も見ることがない。尋ねると気に入ったのがないからみんな捨てるといふ。なんとそれが十年以上も続いているのである。朝早く起こされる私こそいい迷惑だが、いつもうまい土産を持って来るので、仕方なく同行している。私が日の出の写真を送ったら電話があり「ありやあー写真じゃないよ」。全く腹の立つ一声で電話は切れた。

正月も近くなり又彼が東京の虎屋の羊かんを持って、朝早く私を起こしに来るだろう。彼の作品を見ることは、もうあきらめているが、羊かんが欲しいので、今後展望台に登り続けるつもりである。

女の人の写真を撮るのは、私は最も苦手である。実物以上に美しく仕上げないと、けなされること間違いないからである。

どの方向からどのように撮ったら欠点をかくし、いい面を出せるか、いつも頭が痛くなるのである。

しかしどう工夫しても、美しく撮れない女性もこの世にはいるものだ。こんな時は「生まれ変って」と叫びたくなるのである。私は実物より美人に撮れなかった写真は、絶対に渡さないことにしている。つい最近も「写真はまあだあー」と催促する女性の方がいて、私は弱っている。写真はできているのだが、実物そのままなので困っているのである。私がしょんぼりしていると、「写真機にフィルム入れなかったのでしょう」と言う。黙ってうなずいたら「しつかりしなさいよ」と同情的な眼で見つめられ、がくんとなった。

結婚前の妻は、私の作品は写真に限らず、なんでも優しくよくほめてくれたものである。

それが結婚後は、プロ顔負けの辛辣な批評家に変化したのである。「文協いろは」が発行されたら、文法にうるさく私の文章は正常ではないと思っっているらしい妻から、やられることは決定的である。その時は原稿依頼者の小川さんを怨むつもりである。

日本丸寄港の折、浅谷、平野、福岡には百名近くのカメラマンが待機した。私は一人のプロカメラマンに目をつけ観察した。ファインダーをのぞくだけで、なかなかシャッターを押さない。そのうち「絵にならない、向きが悪い、ちったーこっちの身にもなって見ろ」とぼやき始めた。

船が近づいて来たら「船長たのむー」と叫びだした。こんな人につきあっていたら大変だと思い、私はシャッターをきり始めた。あのプロの人は一度もシャッターを押すことなく、島を去られたと思う。

プロの悲哀、そんなものを私は感じた。

旅行中私は一軒の農家の火事に出会ったことがある。消火に手助けしなければと思いつつも、この機会

を逃してはと、写真を撮り続けた。

その夜の宿では、後味の悪い思いで朝まで眠れなかった。

翌朝現場を通りかかったら、小雨の降る焼跡に一人の老人が力無くうなだれていた。私はフィルムのある限り撮りまくった。シャッターを押しながら、なぜか涙がボロボロ流れた。

その中の一枚が入選した。審査員の評は「なにも説明はいらない、見ているだけで胸が熱くなる。偶然の傑作であろう」であつた。それ以来私は偶然を待つ。しがないカメラ愛好者になつたのである。

私の母が百才を過ぎた頃、ひどく生まれ故郷をなつかしがるので写真を撮りに出かけた。母が幼い頃遊んだであろう山や川、幾らか昔の面影の残る生れ育った家などを撮りつつ、母はどのような青春時代を送つたのであろうかと想つた。

母はその写真を一枚一枚ゆつくりと見ながら、懸命に昔の記憶を追っている様子だつた。

一枚の写真を何時までも不思議そうな顔で見ているので「なんば見とるな」と尋ねると「これはどこの田んぼな」と言う「ばあちゃんの実家たい」と答えたら「違うばい、うちの田んぼはこがんとらん」と言う。考えてみると農地改良で昔の面影は全くなかつたのである。

思えばこれが私の最後の親孝行になつた。

東南アジアに写真を撮りに行つた際、自動シャッターを使用中、原地の一人の少年があつという間に写真機を奪い走り出した。給料の一ヶ月分で買ったものであり、私は必死に追いかけた。幸い通りかかった中年の女性が少年を捕え、写真機を取り返してくれた。ところがその女性がタガログ語で何やら私に文句

を言いだした。ゼスチャーから判断すると、金を支払えとわめいている様子、異国の空では強気になれず、結局十五ドルとられた。

その後ホテルの前で、この少年と女性がいかに楽しげに語り合いながら、デパートに入って行く姿を見て、私は啞然となった。見事な母と子の協同作戦だったのだ。

古・近代絵画展の時の私の写真を見ながら、梶原教育長「おーっ、よう撮れとる、よっぽどレンズの良かとすばいね」。

私は数枚の写真を渡すつもりでいたが、出来の悪い一枚を差し出し、公民館を出た。私の写真技術を認めてくれる人は、当分現れそうもない。



花嫁の父

何かにつけて祝い事が華やかな時代になった。かつての戦争のころを思うと、これも平和であればこそという思いもあるが、一方では祝い事が、お祭りさわぎで終わって、消費だけが大きいという、むなしさを感じている人も多い。

農業生産額の半分の五兆円を結婚式に注ぎこむ社会に、私たちは暮している。一体どうしてこんなふうになったのだろうか、考えてみてもいいのではないだろうか。豊かさに慣れた人々が、単純で質素な、かつての生活に再び戻ることはできないのではないか、という危機感すら抱いている人もいる。

生きているうちに、銀シャリを腹いっぱい食べてみたい、と夢みた時代の人々には、現在の華やかな結婚式・披露宴のあり方は、想像もつかなかったことだろう。

個性的になったはずのいまの若者たちも、結婚式の時だけはなぜかうソのように昔ふうになる。

「結婚式は親のためにするようなもので、親が喜びさえすればいい。とにかくスポンサーは親だから」と見事に割り切って、なにもかも親まかせにする若者は多い。もう少しいまの時代の若者らしい結婚式のやり方が、あってもいいのではないかと思うが、なかなかお目にかかれない。

結婚式にたどりつく、いくつかの形式の積み重ねの点で、両方の在所の習慣の相違点があり、なにかと問題も多い。

都市部では万事簡略化されており、田舎ではひととき複雑である。

今日、都市部のホテルなどで催される結婚式での、ゴンドラで降りてくる新奇な演出や、ケーキカット、キャンドルサービス、両親への花束贈呈などといった、一見いわくありげで、単に商業ベースに乗せられているにすぎぬ形式を、いったいだれが本気で喜んでいるのであろうか。

一生に一度のことだから、親のできなかつた夢をこどもにしてやりたい、など本人より親の方が派手にすることを好む例もあると聞く。

ところでめでたいはずの披露宴で、浮かない顔をしている人がいる。それはきまって花嫁の父親である。いかに豪放な性格の持主でも、わが娘を手放すのはよほどこたえるらしい。一抹の寂しさを漂わせて、末席にいる花嫁の父の姿を見ると、人間は別れるために生きているようなもんだ、という思いがしてくる。末の娘さんの結婚を間近に控えた知人は、妙に口数が少なくなり元気が無くなった。日頃は理性的な彼が「なにかあったら別れてすぐ帰って来い。いいか！辛抱なんかするな」と言いだし、家人を当惑させているそうである。めでたい結婚式を前にして、何もかもぶちこわしてしまうような彼の言動である。

近く私はその結婚式に出席する。彼は「式場で俺の顔をジロジロ見るなよっ」と言う。なにも私だって魂を抜かれたような、無表情の花嫁の父の顔など興味が湧くはずがない。

結婚式をすませ歳月が過ぎると、娘婿と意気投合するのが大部分だが、それまでがいろいろと大変である。少々の八つ当たりはまわりが理解してやらないと、花嫁の父の心はますます揺れ動くことになるのである。

一年近くすったもんだしたはてに、やっと知人も結婚を承知したという。式が近まると何もしないくせに妙に気持が落ち着かず、日ごとに苛立っていく花嫁の父の例は数多くある。

結局、強がりを言ってるけど、娘を奪われたような気がして、いささかやけくそになっているのである。

テレビドラマでよく見るお別れ式「お父さま長いことお世話になりました」あれを娘からやられる花嫁の父は、たまったもんではあるまい。ふだん強がりと言っている奴の泣顔を見たいために、お別れ式を無理にすすめる知人もいる。

式の当日朝早く起きて、嫁ぎゆくわが娘のために、ふろをたく父、その間にみそ汁をつくる母「とうちやんのふろと、かあちゃんのみそ汁」と言って泣きだす娘。このようなことを新聞で読んだ。私も早く起きて、朝ぶろをたいてやりたいが、残念なことにわが家には女の子はいない。私がふろをわかすのは、妻にジャンケンで負けたときぐらいである。

最近カラオケの出番を、最大の楽しみに式場にやって来る人が多くなった。「水にきらめく、かがり火は……」と声を張り上げ歌っている人の生き返ったような表情はなかなかいいものである。盛大に拍手

をすと思い違いして、連続して歌うので私は適当に手をたたくことにしている。

マイクを渡されると、途方もない調子外れで歌う知人がいる。一度聞いたら絶対に忘れようもない、すごい歌いぶりである。多くの人が腹痛を訴え、涙を流す人さえいる。歌のうまい人がふえた時代だけに、貴重な存在である。奥さんはプロ級の歌い手だが、拍手は彼の方が断然多い。

結婚式に招待されご馳走を食べるだけの時は、気楽なものである（私は飲めない）。近頃はやりのカラオケの順番もなんとか理由をつけて辞退し、お色直しの度に拍手をするぐらいは、そう苦にはならない。

式場の花嫁はみなしおらしく、控え目で美人である。それに当日だけかもしれないが、無口なのがなによりもいい。何年か後には、その一家の支配者になるとは当日の姿からは想像はできない。

あるホテルでの四百名近い豪華な結婚式に招待された時のことである。見事な洋食の披露宴！張り切って食えることだけを考えていた私を、驚かす事が起きた。祝辞を述べる人が極度の緊張のため、貧血をおこされたのである。知人の司会者があわてて「○○様がお具合が悪くなられましたので、K様をお願いいたします」とこともあろうに私を指名したのである。野球やソフトボールならわかるが、祝辞のピンチヒッターに私は一瞬息を呑んだ。この不意打ちに目の前の洋食の皿が急にかすんで見えてきた。

マイクを渡された以上、黙ってお辞儀をして引きさがるわけにもいかず、あきらめてゆつくりとはじめた。

間もなく、ひきつったような緊張感に包まれていた会場は、爆笑のあらしになり、そして又無人のような、静けさにもどった。

披露宴での新郎は、すべて前途有望な好青年であり、花嫁は才媛で、すばらしい性格の持主ときまつて
いる。又新しい生活の門出にあたり、さまざまな人生訓らしいものが述べられるのが、一般的な祝辞であ
る。だが私はその点には一切ふれなかった。妻は悪い趣味だと言うが、大方の予想を裏切るのは、私の数
少ない得意技の一つである。「スカートとスピーチは短いほどよい」ともいうが、そうもいかない。与え
られた五分間の祝辞を終えると、驚いたことに新郎と花嫁までが拍手をしているのである。いままで幾度
か結婚式に出席したが、このようなことははじめてである。いいようなない感動が私を包んだ。席に着い
た私は、全身の力が抜け、食欲は全くなりやたらに喉が渴いた。その折の食べそこなった洋食の数々
が、いまでも夢に出てきて、私を残念がらせるのである。飾り雛のようにコチコチになった新郎と、ふく
やかな笑みを湛えた新婦との対比が、なんとも心地よい印象を与えていたのを覚えている。

ある結婚式で花嫁の父が謝辞を述べるため、マイクの前に進んだ。日頃からスピーチが好きで、次の人
の持時間までやってしまうことで定評のある人であったが、なかなか始めない。やっと「本日はお忙しい
なかを」までであとと声にならず、うつむいたままである。場内はしずまりかえった。心情を察した参列
者は、誰からともなく立ち上がって、万雷の拍手をこの花嫁の父へ贈った

謝辞が言えなかった花嫁の父、抱きかかえられながら席にもどるその姿は、わが娘への惜別の思いと、
深い愛情を物語っていた。

その日の夜半突然電話がなった。深夜の電話はいやなものである。瞬間不安な気になった。電話は花嫁
の父からで「これからもどうか娘をよろしく」それだけであった。短い言葉ではあったが、娘を思う親の

心情が伝わってきて、夜中になんと人騒がせなという思いも消えてしまった。

男性は大きなことを言っても、女性より孤独に弱い生物ではないかという気がしてならない。おじいさんはすべてが弱りつつあるのに、おばあさんはなかなかしつかり者で、地獄耳も達者だという例はよく見受ける。

女の子のいない私は、あの複雑で微妙な花嫁の父の心理を味わうことはない。長男の結婚式の折など、花嫁を迎える喜びで謝辞など全く苦にならずやってのけた。ところが二男の場合は少々勝手が違った。花嫁の実家は男の子がなくて、頼りにしていた娘を二男が引き抜いての結婚式であった。

松江からはるばる九州は博多の地まで、可愛い娘を手放す親の心情を察した途端、私の挨拶は予定が狂い、親への同情のことばとなってしまうたのである。

博多駅で両親を見送ったが「たのみます」と深々と二男に頭をさげ、目頭を熱くされているのを見て、私までじんときてしまった。

多くの人々の喜びの声の後ろに、花嫁の父の吐息を聞く思いであった。親不孝をすすめるつもりは毛頭ないが、親の真実の心がわかるのは、こどもが老境になってからではないか、という説もある。

思い起こすときりがなくらい、その時々光景が鮮やかに浮かんでくる。結婚式を通して、今後もあるであろう、すばらしい人達との出会いを大切にしていきたい、と心から思うこの頃である。



島を訪れた人

人は日常生活のすべてから開放されて、旅に出たいと思うことがある。田舎の人は都会へ、都会の人は田舎へ、寒い北国の人は暖かい南国へ、海辺の人は山野へと、できるだけ日常環境から離れた異郷の地にあこがれる。住んでいる所と、違いが大きいほど感動も多いものである。

東京の女学校時代の友四人がやって来るといので、十日も前から妻はなんとなく落ち着かない様子である。私も否応なしに家の内外の掃除を丹念にやらされた。

かつては、還暦ぐらいまでの命で、孫の手をひいてお宮参りしているうちに余生が終っていたのに、昭和初期に生まれた彼女らは、九州はおろか、海外まで旅をする元気さである。

ある記録によると、お寺の埋葬帳を調査したら実に七五%が五歳未満の埋葬であることが記録されている。明治・大正になっても、その傾向は続いている。その頃は十歳まで育つのが大変であり、多くの者は幼くして、あの世へ旅立ったのである。医学が発達していなかっただけでなく、貧しさが大きな原因ではなかったかと思われる。衛生や、清潔の習慣も少なく、保健への関心も薄かったようである。

四千年前の人類の平均寿命は十八歳だった。昭和二十年の統計を見ると、日本人の平均寿命は四十九・八歳、人生五十年に充たなかった。それがなんと現在は、人生八十年の時代になったのである。たった四十年間に三十歳も延びたことになる。もし寿命が、毎年一歳ずつ延びたらどうなるか、いまの若い人達は、永久に死ねなくなってしまうのではないかと、ちよつと心配になる。社会も混乱するのではないか。そのようなことを妻に話したら、呆れたような顔をして「あなたは長生きする」と苦笑した。

かつては定年退職の頃に合わせて、寿命のつきる人が少なくなかった。人生五十年時代は家族も短い間だったから、一生懸命親孝行することができた。人生八十年時代になると、定年から二十年以上も生きなければならぬ。喜んでばかりいられない気がする。老いた両親の世話で、家族も疲れ果て、お嫁にゆけないオールドミスが増えるのではないかと気がもめる。

女性の過去にたいする記憶力の正確さに、驚かされたことは何度もある。女性は男性とちがって必ずむかしを大事にする。

「明日は何の日だったか、憶えていますか」と妻から言われるとドキツとする。結婚式がいつだったか、結婚前にどんな約束をしたか、むかしラブレターでどんなことを書いたか、そんなことはすっかり忘れている。

戦前の東京の下町の暮しについて、古いアルバムを見るように懐かしきで、妻は少女の頃の日々の記憶を時折私に語る。田舎育ちの私にはすべて未知の世界であり、童画を見るような感じである。

彼女らがやって来る当日は、風もなく空は晴れた。旅行は天候に左右される。ほんとうによかったと妻

は喜んだ。接待準備に忙しい妻に代わって、唐津駅まで出迎えるのが、きょうの私の役目である。四人の女性の写真を何度も見せられた。都会育ちの洗練された、なにかは感じたが、驚くほどの美人には見えなかった。

駅の改札口で四人連れの女性を見つけ「東京からですか」と声をかけたら「いいえ」と首を横にふられた。改札口の駅員も去り、ちよつと不安になりかけた時、笑顔で四人組みがやって来た。私が前の四人連れに間違つて声をかけるのを、陰で楽しんでいた気配があつた。六十になつても、なおこの茶目つ氣に私はいささか参つたが初対面の固さはとれた。

わが家までの車の中の三十分は、自然の風景に対する感歎の音が殆どであつた。東京育ちの彼女らは真新しいビルなど見向きもしない。古い裏通りや、護岸工事をしていない川や海岸に人気が集まつた。真つ青な秋空と美しい雲と、なだらかな稜線を描く山々に「温かみがある」「気持ちがいやすらぐ」と声をあげた。

東京は高層ビルの林立で、どこもアスファルトだ。都心で土の出ているところはない。人間よりも寿命の長いはずの樹木が、バタバタと枯れてゆくのが今日の東京の姿である。

わが家に、足を一步踏み入れると、もう私の出番はない。幼い頃の思い出、近況報告、昭和初期に生まれた彼女らのたどつた道は、戦争と無関係ではあり得ない。小波のように沸き上がるくすくす笑い、沈黙、そして哄笑、和氣あいあいとした雰囲気は広がっているのが、隣の部屋にいる私にも判つた。権力や貧富の差に惑わされることなく、真実をみつめる目、物事を公平に判断するバランス感覚のよさに、私は驚き

に近いものを感じた。

島内一周を終えた彼女らは、大山展望台より眺めた大小の島々や海岸線、白い雲、今山神社の自然林に感動を覚えたと言ひ、東京での生活では味わえなかった、小さな地域社会の住民同志の仲間意識、人間のふれあい、人情というものを改めてしみじみと感じた、ともらしていた。

一本の木を切る時に、同じ木を育てるには、また何年もかかるということを経験するようになったのは近年のことである。いったん失った自然を取り戻すためには、大変な努力と長い時間がかかる。人間が自然をこわすときは、必ず何かの利益を求めている。利益の大きさが、便利さが、自然を失うことのおそろしさを忘れさせるのである。自然本来の姿が維持されていると、心安らかに散策を楽しむ気にもなり、夜の空の月や星を仰がずにはいられない心境にもさせられる。

高速道路が発達し、自動車は山間地を矢のように走る。都市化の波に農村も洗われてゆく。島の海岸にもポリエチレンの容器、プラスチック、ビニールのプロシキなど、種々雑多な物が流れよっている。

晩年は田舎の豊かな自然の中でゆっくりと過ごしたいとよく人はいう。実際は、歳をとって田舎に引込んだ人に聞くと、寂しくてしょうがない、生活が不便だという。そうなるのを知っているからこそ、現実には歳をとっても都会に住みたいという人の方が多いのである。積極的に都会にいて、やるべき仕事、やりたい遊びでもたくさんあるという人が増えているのである。都市に長く住んできた人ならなおのこと、都会の便利さは身にしみて知っている。培ってきた人間関係もある。住み慣れた都市を離れて、いくら景色がよいからといって、簡単に移住はできない。田舎に住んで、貧しさの中で、楽しみを発見することは、

なまやさしいことではなく、一種の才能がいるのである。いい芝居が見られないことは、どれほど辛いかわ、いろんな美術展や音楽会と、無縁になることは、生活にどんな意味を持つのか、趣味のいい衣服がないことは、どんなに淋しいか、それらは下らないことのように見えていて、実は意外と重大なことではないだろうか。淡白な山菜料理にはすぐ捲き、歌舞伎や洋画が見たくなり、野暮な衣服は身につけたくないに違いない。

列島改造論以後、海だったところが陸地になり島が消えたり川が消えたりしている。親の敵のようにむかしの面影を消しているのである。むかしのままであるべきだとは勿論思わないが、面影まで消し去るのは、なんともわびしい思いがしてならない。自然をコンクリートと鉄とガラスに変えることが、あまりにも多く、やせ細る自然の緑をなげくのは、老い近き者のいつときの感傷なのであろうか。

かわりゆく生活、遷りゆく世相、今後、人心、物質の交流はいつそうはげしくなるだろうが、郷土福島を持つ素朴な住民性だけは失いたくないものである。

佐賀県のキャッチフレーズは「人情の産地」である。わが郷土を訪れる人々に、心なごむような素朴さを、島のキャッチフレーズにできないものであろうか、と思うこの頃である。

唐津市に住む画家で歌人のSさんから、次のような便りがあった。

昨日突然知人にさそわれて、福島へ参りました。漫然と花を尋ねての遊びでしたが、田舎、田舎を回って、最後に波多津へ来たついでに福島まで足をのばしました。ところが車のガソリンが切れそう

になり、福島町の町を方々さがしたのですが、生憎日曜のこととて、どこも休みで困り果てました。仕方なく駐在所におすがりしようと思ったのですが、これ又お留守でした。ほとほと困り果てて、郵便局の近くの三叉路の角にオートバイ屋さんがありましたので、どこかお知りあいでもありませんか、とお頼みしたら、あちこち電話をして休日の一軒にご相談して頂きました。その上自分で遠いところを先導して店の主人に頼んで下さいました。一時はどうなることかと思いましたが、ほっといたしました。

一日花を尋ねまわって、最後の福島で美しい人の心に接して、すばらしい、忘れ得ぬ一日となりました。なおその若い人は、波多津の桜の名所を教えてくださいましたので、行って見ますと、実にすばらしい老木の桜がありました。

かねがね福島は椿の島として、あこがれていましたが、その椿よりも美しい人の心の花も咲いていたのかと、深い感動に胸を打たれました。

突然で失礼と思いましたが、先生の住む島にこんな美しさを見ましたので、先生にもお礼を申し上げたく、一筆したためました。

うるわしき人の心を島に見ぬ花尋ね来し旅のはたての



傘はなくても雨は降る

傘をどこかに忘れてくるのは、私の得意技のひとつである。妻は心得たものであまり高価な傘は買ってくれない。いままでになくした多くの傘のことを考えると、不平は言えない私の立場である。傘をなくすのは私の不注意だけでなく、天候にも責任はあると思っている。私が帰宅するまで雨が降り続いていれば忘れることもないのと思うのである。天気がよくても悪くても、空に向かって文句のいいようもないので、もつぱら天気予報のせいにする。雨の後晴れ、などというから晴れるのだというテレビに文句をいいたくなる。

私は買物が苦手である。自分で喜んで買いにゆくのは本ぐらいである。妻と買物にゆくと「あなたと一

緒だとせかされて、ゆっくり品物を選べない」と文句を言われる。あれこれショー・ケースから取り出させたあげくにも買わないで引き揚げるといふ芸当は、女性でなければできない。その点私などはあわれなものである。偶然手にしたネクタイを買い、一度も使用しないものもある。店員がすすめたらそれを買、後悔することも多い。万一、妻に先立たれるようなことにでもなったら炊事、洗濯、掃除はともかく、買物の点で致命的打撃を受ける。いろいろ考えた揚句、私が先にあの世へ旅立つことを心秘かに決めた。以来随分と気が楽になりお茶もコーヒーも一段と旨く飲めるようになった。

久しぶりに佐世保の書店まで出かけた。目的の本を探すのに随分と時間がかかった。書店の入り口の投げ入れの傘立てに置いていた筈の私の傘がないのに気がついた。外はかなりの雨が降っている。親切そうな女店員さんを選び自分の傘がないことを告げた。「お客さんすみませんが自分の傘をちよつと、とつて下さい」と店内の人々に声をかけてくれた。そして残った一本の傘を私に差し出し「これで我慢して下さい」と頭を下げた。私はお礼を言つて書店を出た。かなり上質の新しい傘であつた。帰宅して妻にそのことを告げたら、呆然とした顔つきになり、次には笑いこけた。家を出る時には雨は降っていないくて、傘は持つて行かなかつたと言うのである。調べて見るとなくした筈の私の傘は玄関の傘立てにあつた。

小学校の一年生になった早々、読み方の教科書でミノカサ、カラカサという文を教わつた。いまだきミノカサやカラカサを知っているこどもはいらるうか。そんなことを考えているうちに傘に関する幼い頃の出来事を思いだした。雨が降ると必ず学校を休む友だちがいた。傘がないので学校へ行けないのである。翌日はきまつて担任の先生からひどく叱られていた。貧しくて傘を買ってもらえないとは恥ずかしくて言

えず、頭が痛かったとか、腹が痛かったなどと小さな声でぼそぼそ言っていた。

何十年か前までの貧乏には食事も満足に得られないものがあつた。私たち年代の人たちは多かれ少なかれ貧乏の記憶を持つている。たとえ自分の家は貧しくなくても、まわりには貧乏があつた。「一杯のかけそば」に見られるような医者になつたりする幸せにめぐまれることもなく、貧しいままに生涯を終えた人々を見聞している。

学校の昼休みになると弁当を持たぬ幾人かの子らは、窓際に相寄りうつろな眼で運動場を見ていた。博打は打つ、酒は飲む、心荒れた亭主を事故で亡くした彼の母は「どうせ生きてる値打ちのない母子たい」と口癖のように言っていた。暗い裸か電球の下にむかい合う母と子の姿がいまでも眼に浮かぶ。彼が話すことはみんな富へのあこがれであつた。どんなに辛かろうと、それを聞いてくれる身寄りはいなかつたし、話す気力もなかつた。軒は垂れ壁も落ちるがままの世に忘れられたような孤独な人生がそこにはあつた。まだ幼かつた私たち仲間は彼の粗末な衣服や日の浦の海岸で拾つたと思える下駄などを嘲笑した。みんながはやしたてると、自分も仲間に加わりそれに輪をかけるような言葉ではやしたてた。彼は反抗することもなく悲しそうな目で、子供たちの群をいつも見つめていた。

末っ子の私は随分と父母に可愛がられた記憶が多いが、ある日父から呼びつけられひどく叱られた忘れることのできない思い出がある。育つ環境を侮辱して友を苦しみに落とすという卑劣なことは、人としてどんなに恥ずかしいことか、というような意味の言葉で長いこと説教をされた。私は幾度もうなずきながら胸のうずきのようなものを覚え、顔を上げることができなかった。体中が熱くなり自分の頬が引きつ

ているのがわかった。

父は真新しい一本の傘を私に渡し、彼の家に持って行けと言う。反抗を許さぬきびしい父の顔であった。雨の中、少し古くなった自分の傘をさし新しい傘を持って彼の家を訪れた。目が合った時、彼の顔にかすかな輝きが走った。彼は「おおきん」とかすれた声で言った。以来、雨が降っても彼は学校を欠席することとはなかった。

人生の中で経験する別れというものは、さまざまなものがある。何でもない別れと思っていたものが、そのまま永遠の別れとなってしまった場合もある。島で育った私は船の別れが殆どである。船の場合、自動車や汽車と違い実にゆっくりと港を出る。舢舨に乗り渡海船に移っていたあの頃は別れのさみしさを殊更強く感じたものである。それは全く関係のないものが傍らから見ていても、さみしい光景ではなかったかと思う。ようやく陽の昇った静かな朝の海に、舢舨の櫓の音がだんだん小さくなって、渡海船に移ると「ポーッ」と別れの汽笛を鳴らし、遠ざかってゆく。海岸で見送っている人たちは立ったまま、じつとその船を見ているが、こういう別れ方は、長い間心に残るものである。船の別れについては忘れることのできない思い出がある。

私は昭和十七年に召集を受け、陸軍の船に乗り東南アジア各地をまわった。昭和十九年の秋、マニラから門司に寄港したことがある。小雨の降る夕暮れの門司港での出来事である。出港前の輸送船の甲板上年の頃まだ十五・六歳の少年兵の一団が、岩壁の方に向かって直立不動の姿勢をとり挙手の礼をしている姿を発見した。私は誰かに別れの挨拶をしているのかと思ひ埠頭のあたりを見渡したが、全く人影はな

った。その時私はハッと気がついた。この少年兵の一人は知人や家族に別れを告げていたものではなく、祖国日本に最期の別れを告げていたのである。この少年兵を乗せた輸送船団は南方の戦場に到着することなく、バシー海峡の藻屑と消えたとセブの港で聞いた。以来四十余年たった現在でもこの少年兵の最期の姿が、いろいろな意味を込めて鮮烈に私の胸を打つ。現在の青少年たちとのあまりにも、大きな違いに何ともいいようのない気持になるのである。

彼が県外のお寺の小僧さんになるという話を聞いたのは、四年生か五年生の夏休みだったと思う。「あの子だったら、どんな厳しい修行にも耐えられるだろう」と私の父母が話していた。そうしなければ食ってゆけない日もある人生だったのだろう。彼が島を去る日、私は母と日の浦の海岸まで見送りに行った。母はお守りと幾らかの銭を彼のふところに押し込んだ。彼は別れに際しても涙は流さなかった。いつのまにか自分の悲運な境遇を諦めていたのである。小さな肩に古びた柳行李を背負い島を去ってゆく彼の後ろ姿に、母親はどんな思いを抱いたであろうか。付き添いの眼光鋭い僧侶に私の母は幾度もお辞儀を繰り返していた。

危なっかしい足どりで舢に乘る彼は無言で見送った。彼も最後まで沈黙を守った。彼は一度も振り返らず、私はさよならが言えなかった。海の色はくすんでいたが、波は穏やかだった。わずかばかりの金がないために彼がこうむった悲しみと寂しさを思うと、切ない気持になった。彼の母親は渡海船が見えなくなっても海岸から離れようとはしなかった。

当時どこの村にもひとつやふたつころがっていた悲劇を背負って、眩しい朝の光のなかを彼は島を去つ

て行つた。これも生き延びるための正しい選択だったのだ。そう思う。彼は島に残るよりもずっとましな人生を送ることになるだろうと思つた。島を離れることがこの母と子の唯一の生きる道だったに違いない。東北地方の寒村で「娘さんを売る前に役場に相談して下さい」という紙が貼られていた時代であり「早く死ねばこんな飢きんにあわなくてもよかつた」と多くの老人がくやんだ時代でもあつた。

昭和五十八年私は彼と会つた。一見して彼が戦場から故国へ戻ってくるまでの何年間かは、想像を絶する日々だったに違いないと思わせる身体になつていた。「シベリヤにいた」それだけで多くは語らなかつた。座ることができない為に僧籍にもどれなかつたと言う。私の父母の墓の方向を尋ね、聞き覚えのある浄土真宗のお経を小さな声で唱え出した。「ほんとうに人の心の痛みのわかる方だった」と言い、顔を赤らめながら一本の傘を私に渡した。何かをいっても言葉にならないような気がして、固い握手を交わした。いかに保守的と言われようとも「現在の自由と平和は戦時中の幾百万人の若人の犠牲の上に立ったものである」という自分の思いは消えることはないと言ひ、ともかく生きている。死に脅かされることもない。食べるために懸命だった少年時代も今は懐かしい想いさえするとも言つた。

かつての青少年の犯罪は、貧困と親のいない家庭に多かつたが、現在では中流階級以上の家庭で多く発生していることについて、世相の変わりように衝撃を受けると沈んだ声で語り、彼は島を去つて行つた。辛い過去、悲しい想ひ出、孤独感をもちながら、しかし温かさ、やさしさを忘れずに懸命に生きている彼に接して、胸の奥から突き上げてくる熱いものをどうしようもなかつた。不自由な身体で島を訪れた彼のやさしさに心打たれ、その夜はなかなか寝つかれなかつた。父母がそばにいて、その慈愛に包まれて育

った者であつても、情念ゆたかな志を抱くとは限らない。生れ育つた土地の風土、人情がひとりひとりの性格の一部をこしらえるという、一つの見方を私がするようになったのはこの頃からである。





酒をめぐる断想

父は全く酒を飲まなかった。体質的にアルコールを受けつけないたちだったのだろう。わが家の食前に酒が登場することはなかった。奈良漬を食べて顔を赤くした父の姿がいまでも目に浮かぶ。私はこうした環境に育ったためか、空き腹のときなんかビールならコップ一杯で真っ赤になり、道もまっすぐには歩けなくなる。西部劇でカウボーイがぐっとバーボンを一杯ひっかけて、その足で決闘におもむく。あれを真似して私がヘネシーを一気に飲んで役場に出掛けたら、用件を全く思い出せず、すごすごと帰宅した。生まれたときは丸はだかで誰でもスタートラインはいっしょのはずである。どの辺の段階で訓練されて差が出てくるものであろうか。

酒は人間の集団生活に極めてかかわりが深いことを強く感じるこの頃である。実に多面的な魅力を備えていて、楽しみ方はたくさんあることを日の浦の人々から知らされた。酒は人間が口によって、生活に楽しみを与え、生活を豊かにし、一日の疲れをいやしてくれる反面、いろいろとマイナスの面も持つ特殊なものである。「どこが気に入ってご主人と結婚したんですか」と或る人が妻に尋ねたら「酒を飲

まないから、それだけっ」といとも簡単明快に笑いながら言ったことがある。他にはなんの取柄もない男のようで、当時の私はかなり落ち込んだものだ。

自分が飲めないからといって、飲む人の方が間違っているかのように言ったり、思ったりはしない。

日の浦の女性軍がいかにもうまそうにウイスキーの水割りを飲むのを幾度か見ているうちに、最近少し心境の変化を来たした。海外旅行の土産に貰ったヘネシーを飲んでみたら、意外にうまいのに驚いた。早速洋酒に関する本を数冊買い込んで勉強を始めたらかななか面白い。ウイスキー・ブランデー・ワインの製造工程など、下手な随筆より興味が湧いて来た。

デパートに入ると先ず洋酒部門を見て廻るようになった私の変化に、妻や知人があきれたような顔をしている。ルーマニヤのチャウシエスク夫妻の私邸の宴のあとの写真に、レミー・マルタンの空箱がころがっていたのが印象に残るほどになった。

私は晩酌をしたことがない。男が家に帰って、妻子を前にチビチビやりながら、一家を支えているという責任感に浸りつつ「今日も一日よく働いたなあ」などと上機嫌で話したりするのは、それはそれでいい。だが仲のいい友だち二人か三人で財布にあまり影響を与えないような場所で、上役の悪口を酒のサカナにして飲むのもうまいのではないかと思う。これは、多くの人が実行している。どこの飲み屋に行っても、上役の悪口はいっぱい充滿している。それが人生なのかも知れない。

酒はふんいきで飲むものだという人は多い。いちがいにそうとも言いきれまいが、一理はあろう。

夫が酒を飲み、妻が泣いて止めるといった酒を挟んで女性対男性が敵対する構造が最近ではあまり見ら

れない。かつては妻子がどんなに貧しいものを食べていても、自分の前には酒とさかなが並んでいなければ承知しない人もいたし、酔えば酔ったで、妻子に当たり散らした人もいた。そんな夫たちの酒に、さんざん泣かされて来たのだが夫の死んだあと、いつのころからか晩酌を始め、少量の日本酒を楽しんでいる人もいる。

随筆家のM氏は他人に迷惑をかけずに、まわりの人々をすばらしい雰囲気巻き込むほれぼれする飲み方をする人である。そのM氏が忘年会の場で次のような話をした。

酒好きだった友人が入院した。医者から酒は禁止されていたが見舞いにやって来る人々に「おい頼む、ほんの少しでいいから飲ませてくれよ、なめるだけでいいからさ」と言い周囲を困らせた。あんまり可哀想だから飲ませてやろう、と奥さんや友人たちが決意したときは、もう飲める状態ではなかった。ものが言えなくなったら彼に奥さんはとりすがって、ご免なさい、ご免なさいと悲痛な声で泣き叫んだ。あのとき少しだけでも飲ませてやればよかったと、残された奥さんは悔やみ続けたという。

この話を聞いて、007のジェームズ・ボンドが「酒が飲めなくて死ぬより飲みすぎて死ぬほうがいい」と言った言葉が頭に浮かんだ。それほどまでに、酒好きの人が飲みたいと思う酒の味を、私はわからないままに年を重ねて来た。

体調の悪いときの酒や、気に染まない相手と飲む酒はいかなる名酒であろうと、舌には苦いのではないだろう。逆に盛りあがった愉快的席で酌みかわす酒は、すばらしい味になるう。

「誰でも二度とは生まれてこないこの世だから、できるだけ永く生きて飲みたいのは当然である」と知

人は言う。歳の暮れには、忘年会が多くて疲れて仕方がない。そのための出費もまた相当なものだと、酒の好きな面々は嬉しさをかくして、一応困ったような顔をして見せる。ふだんいっしょに働いている人が集まって楽しく飲み、いい気持になって夜の街を歩くのも無意味ではないと二日酔いの頭をふりふり強調する。

コーヒーを飲みながら人を待つのは、長い間の私の習慣であるが、豊かな香りと品格のある味わいを持つ類いまれなスコッチを、じっくり楽しみながら人を待つという楽しみも、いくらかわかるようになってきた。

当時海軍工廠の総務部にいた私に、赤紙がきたのは昭和十七年の四月。太平洋戦争は五ヶ月前に始まっていた。島でも出征兵士が出ることは珍しくなくなっていた。赫々たる戦果が報道されていた時代であり、私の感傷など入りこむ余地は全くなかった。伊万里駅で多くの人たちの万歳の見送りを受けたが、母は少し離れてひとり立っていた。そのときになって初めて母の老けこみに気がついた。若かった頃の母の姿をなぜか思い出した。母は頻りに眼をしばたいては、あらぬ方を見ていた。私は母を見ていられなくなった。前夜の最期の夕飯の折に「自分から死のうと思うなよ」これが私の出征に当たっての母のひと言であった。当時の風潮に対する母の精一杯の反抗の言葉ともとれたし、血を分けた母親の本能的な愛情が言わせた言葉ともとれた。

父と二人駅を離れていく汽車に乗り込むと、さまざまな想いが交さくした。この汽車には実にいろいろな人が、さまざまな気持で乗っているに違いない。そんなことを思った。

小学校の低学年のころ、姉に悪態をついたらよほど腹にすえたのか「お前はね。ほんとうは捨て子だったとばい、炭坑の空納屋に捨ててあった赤ん坊ば可哀想かと言うて、母ちゃんが育ててくれらしたとばい。その証拠にうちのもんは、右兵衛・左兵衛と名が付いとるに、お前だけ諭吉と付いとるじやるが、わかったね」当時の私にとって、これ以上の打撃はなかった。人生の一大事として、本気で悩み続けた。二年近くこの事が頭から離れず親に逆らうことは全くできなかった。生きて再び故郷の地を踏むことができれば、姉に笑いながらこのことを話したい、そう思った。

大村の宿に着くと父のあとについて、玄関に入り、その頃では珍しい真新しいタタミの匂いが籠る部屋に案内された。ここですか話されないことが山ほどあるような気がしていたが、向き合って間近に顔を合せてしまうと、気持が昂って容易に言葉にならず、父の方も言いたいことがありそうだが抑えている様子であった。

「明日入隊ですか、これは私のお祝いです」と宿のおかみさんが一本の銚子を食卓に置いた。私たち父子はお互いに顔を見合わせ、この一本の酒をじっと見つめた。その夜が父と子の初めて酌みかわす盃であった。父が一杯、子が二杯、それ以上は苦くて飲めなかった。

翌朝、私たち父子は肩が触れるほど隣合せに並んで大村連隊の正門への道を歩いた。ずいぶん長い間黙り込んだまま、とぼとぼと歩いた。息詰まる感じから逃れるために「もうここがいい」と私は小さな声でつぶやいた。父は立ちどまり、目を閉じた。父とはもう二度と顔を合わせることはできないのではないか、ふとそんな気がした。私はその横顔を、鍛の多くなった口許や禿げた頭を見つめた。生涯にたった一度で

はあったが父の頬に、一筋の涙が伝わり落ちたのを私は見た。この時の父の表情はいまでも思い浮べることが出来る。父はしばらくためらったあと、やがて引きずるような足どりで今きた道を引き返して行つた。私は後を振り返らなかつた。

激しい三ヶ月の訓練のあと、戦地へ向つたが復員するまでの四年間一度も便りをしなかつた親不孝な私であつた。復員して「ただいま」と声をかけたら、私が死んだものと諦めていた父は莊然としていたが、生還を信じていた節のある母は、当然のような顔で「お帰り」と大きな声を出した。その夜の食卓にも酒はなかつた。復員して一年三ヶ月で父はあつけなくあの世へ旅立つた。現在の私より若くして逝つたが、そのぶん母が長生きをしてくれた。

この秋、二日市温泉で戦友会をやつた。私が飲めないのは承知だとばかり、戦友たちは私のコップにウーロン茶をなみなみと注いでは同情的な目で見つめた。飲めないさみしさを、ちよつぱり味わつて再会を約した。戦争が終り、四十五年の歳月が過ぎた。戦争の記憶はすでに遠い遙かなものになつてしまつたかも知れないが、いかに歳月が褪せて行こうとも私の脳裏には、時として故郷の父母や愛する妻子を案じ、郷土の酒を想いつつ果てて逝つた人たちの、凄惨とも言える記憶が甦る。



黄昏

私の小学校の頃の夏休みは、毎朝、腕白大将の命令で日の浦の広場での早起き会に出かけたものだ。まだ家族が起き出てこないうちに、ひとり床を離れ台所の横を通ると、母が早くも飯を炊き上げ、おひつに移しているところである。母は私を見ると、その釜の底のおこげのところを、塩で結んで小皿に乗せ、黙って私の前へ差し出す。それは握るのがさぞや熱かろうと想像がつくほどで、私はフーフー言いながらそれを食べ終え、夏の朝のひんやりと快い道を広場へ向って走るのが、この時期の楽しい日課だった。

島に住む人々は実直な人が多いが、それは自然からものを学ぶという体験を子供の頃から身につけているからだろう。最近、学校に行き来する子供の姿は見られても、野山や海辺で遊ぶ姿も、野良で親の手伝いをする姿も見ることが少ない。これは都会の生活も農村の生活もその差は少なくなってきたかわり、現在の社会で起こっているさまざまな問題が、決して都会だけに集中する質のものではなく、農漁村にも起り得

るものだということを示していると思われる。

一度ゆつくり訪ねてみたいと思っていた淡路島で知人の結婚式があり妻と出かけた。街は強い潮の匂いに包まれていた。高層の建物が少ないので空は広いし、明らかに戦前の建物と思われるものが並んでいた。普段、私は街中で知らない人に話しかけたりすることはない。それが淡路島では何人かの人に話しかけた。どこかノンビリしたところがまだあり嬉しかった。

結婚式って何でこんなに金がかかるんだろう。子供を何人も持っている親は、まるで子供たちの結婚式のために働いているようなもんだと同情した。プロ化した司会者のおしゃべり。シヨーのような新郎新婦の入場。でかいウェディング・ケーキへの入刀。お色直し。打ちかけ姿からウェディング・ドレスへ。新婚旅行用の服へ。お色直しのたびの拍手の強要。キャンドル・サービス。両親への花束贈呈。これらのことが、なお今日も「盛大」に続いているのを見ると、世間の大方の人々は、やむを得ない儀式だとあきらめているのだろうか。わずか四十年前、彼ら両親が結婚したころは、こんな風習はなかった。昔の結婚式を知っている筈の観たちが、なぜ息子や娘のために、あんな虚式をやるのだろうか。自分らに果たせなかった「華やかな結婚式」をやってみたいのだろうか。

戦前の日本の貧しさ戦争中と戦後の食糧難と飢餓、住宅難、生活の窮乏を知っている私たちの世代にとって、現在の生活は比較にならぬほど便利で快適になっている。たいいていの家には、テレビ、洗濯機、冷蔵庫、ステレオ、掃除機、カメラ、電気炊飯器、さらにクーラーや各種暖房具、ピアノまでそろっている。昔、といってもほんの四十年前、私の妻などはタライに向かってごしごし洗濯をやっていた。

私はとき折り交友関係のパーティに出掛けることがある。うまいものを選び、珍しい料理を食うため、会場をうろうろする私がこんなことを書くのはちよつと気が引けるが、豪華なホテルの中のテーブルに料理の山が食い散らかされたまま残されているのを見ると、昔の人の言うとおり、これではいつかバチが当たるのではないかという気になる。

たくあんにたらす一滴二滴の醤油がぜいたくだったころ、島の老人が、「なんとか竹の子のとれる時期に死にたかあ、そうすりやあー精進料理も作りやすかけんなあ、残つたうちのもんも助かるたい。もうお医者さんにかかっても無駄じゃけん、呼ばんごと言うとはって、息子が言うことときかじい呼ぶとばい。気持は嬉かばって、お金のもったいなかあ」と涙声で話した言葉が、今でも私の耳に残っている。

式場で謡曲の「結婚式」というのをうたわれた。中に「夫婦はこれ宿縁」という一節があるが、ほんとうにいい言葉だと思う。人の縁とは不思議なものだと思つづくと思う。

健康な妻が四十度を超す熱を出して寝込んだ。今までになかったことである。高熱で謔言を言う妻が可哀想であつた。妻は運悪く私のところに嫁したのではなく、私の考え方がちよつと變つているところ（いまは普通）と貧乏で強情つぱりなところ（いまは氣が弱い）。つまりこういう男は自分でなくちや面倒を見る女性はいないだろう、と憐れんで来てくれたのである。私が妻から学んだものは物を大切にすること、人を大切にする氣持であつた。われわれの生活はほんのわずかのことで變調を來たすものである。それだけに何事もなくて一日が過ごせるのは、すばらしいことだと感謝しなくてはならないと思う。

いずれは私たちのどちらかが病むであらう。そしてこの世を去るであらう。そして一人だけが残される。

老いの辛さは誰にもいずれはやって来るのだ。秋にものの哀れを感じた昔の人たちの心の繊細さを、この年になってつくづく思う。

私たちが結婚した当初は、八畳一間の貸間だった。そのガランとした部屋にあったものは、ふとんや鍋釜をのぞけば、タンス一つぐらいだった。四十年を超す私ら夫婦生活のなかで、あの頃くらい生きるという事に懸命だったときはなかった。そういう何もない貧しい生活、この世に自分たち二人が寄り添って生きている事実を、毎日確認するようなものだった。

人は生まれつきいろんな特徴を持って生まれてくる。美しい子もいればそうでない子もいる。頭のいいのめいれば、運動神経のすばらしいのめいもいる。みないいところもあれば悪いところもある。デコボコしているのが人間であって、だからこそ人間は面白いと思う。

どんな職業にもそれ相応の悩み、喜び、いやなこと、嬉しいこと、トラブル、友だちつきあいの楽しさ、つらさ、誇りとかある。誰でもそれを言う。自分の職業に満足している人は少ない。たいていの人は「食っていくため」と言っている。いやな仕事でも収入を得るために我慢し、家族のためというぐあいに生きている人は多い。

物が豊かになり、衣食住のスタイルが昔にくらべ大きく変化している現代社会においては、考え方や人の生き方も変化している。かつての社会には「断ちもの」という習わしがあった。神にある願いごとをするために何かを断つ。塩断ち、茶断ち、酒断ちなどをする。断つことが自分にとって苦痛なものを、ある一定の期間断つわけだ。私はこれは捨て難い習わしだという思いが強い。子供の頃の大病、復員後わかっ

た出征中の母の断ちものは、父が心配のあまり止めるほどであったという。母のたった行動の数々は、愛の深さは、痛いほど私の心をゆさぶった。

新聞で、知名士の死亡欄を見ると、いつの頃からか、その年齢に目が行くようになった。私と縁のない知名士の死亡は、ニュースとしての関心の方が強いが、自分の友人知人とか、島のほぼ年齢の近い人などの訃報に接するとやはり何とも言えない感慨に浸らざるを得ない。その何とも言えない、胸をしめつけられるような感慨は、年をとるにつれて深まって行くようである。

高齢化時代とはよくぞ言ったもので、近年は街を歩いて、乗りものに乗ってもずい分と老人が目立つようになってきた。私も勿論その一人であるがあまりにも老人の多い場面に行き合うと、どのような生き方をされているのかと、ふと考える。

福岡へ行く電車に乗っていて、自分より年上の人のいないのに気が付きせめて、後九年しか残っていない二十世紀を、せいぜい大事にしたいものだと思ったりする。どうせ縁もゆかりもありそうにもない二十世紀には目もくれないで、黄昏の二十世紀の、足元をしつかり見つめて、てくてく歩いて行こうと思っている。

ある程度心身の老化が進むと、体力的に若い人と行動ができにくくなると同時に、精神的にも若い世代の情緒について行けなくなるようである。死というものは、このようにして、まず身体、次に精神の順で、次第に社会や家族から距離を置くようになり、ついに完全に姿を消す、という状態をいうのではないかと近ごろ思うようになってきた。

かつてはどんな席に出ても自分がいちばん若かったのに、いつのまにかいちばん年かさになっている。人は年をとったからといって決して利口になるわけではない。もし利口になるならこの高齢化社会は利口者だらけになっているはずなのに、そうは思えない。

戦争によって、死んだ人、親や子供を亡くした人、家を焼かれた人、財産を失った人、多くの不幸が発生した。こうした災害とは別に、食糧、衣料の欠乏という日常生活の苦しさもあった。豊かな時代に育った人たちは戦争の悲惨さは歴史で知ることができても、日常生活がどれほど困難であったかは、想像することはむづかしいと思う。戦争の苦しさを知らない人が多数になった時、又戦争が起きはしないかと気になる。

私の人生も残りは少ない。今の平和と繁栄が逆転するという波瀾はもうないように願っている。

別れはつらいものである。私には二人の兄と一人の姉がいるが、どうも私が最後の生き残りになるような気がしてならない。その時は、独りで泣きながら、兄姉の供養を心を込めてやってやりたいと、真剣に考えている。可愛がられて育った末っ子の、せめてものおくりものだと思っている。

秋になって、木の葉が枝から落ちるように、或る日、ごとりとこの世を去りたいものである。できれば世話になった妻にサヨナラが言えれば、この上もない。



海の光

夏草の繁殖力はすさまじく、ちよつと怠けると庭は草だらけになってしまう。人間には夏バテという現象があるが、庭の雑草にはそんなものはないらしい。わが家を訪れる人々の多くが伸びた草を眺めては、刈り取ってくれた。庭の草を取りながら思うことは、農業は不自然な姿勢で長時間、労働にしたがわねばならないという過酷なものがあるが、わが家の庭ぐらゐの広さでは問題にならない。むしろバランスのとれたよい運動になる。だが若いころにはひと晩の熟睡で完全に抜けた疲労も、今はそうはいかない。

時の流れの早さには逆らう術もない。年の瀬が迫ると、七十歳にはなりたくないと思いつながら、この数年間を過ごしてきた。しかしこればかりはどうにもならず、寂しい思いをしている。

老化は人によってそのテンポはちがっても確実にやってくる。考えねばならないことは「オレだけは別だ」と思つてはならないことであらう。からだの老化は、いやでも知らされるが、自分でボケたということはわからないからやっかいだ。老人には孤独がつきまとう。孤独に強い人はいいが、孤独に弱い人はみじめである。とくに若いときにちやほやされた人ほど、老人になつて孤独に耐えられなくなるようである。年をとると、人間のからだや脳が老化し、社会の中での存在がだんだんうすくなる。歳をかさねるにしたがつて、ひとはみずからの周囲にいる人間とばかり交友をむすびがちになる。年をとれば親友の数は必ず減り、そうでなければ自分が死ぬかのどちらかである。

庭いじりを楽しみ、孫に小遣いをやり、たまには温泉や海外にでも行けるような老後を持ちたいと思う人は多い。はたしてどれだけの人にその余裕があるだろうか。

この年、幾人かの知人や友人がこの世を去つていった。平戸にすむ彼は、多くの人々の前で尺八の演奏中かがみこんだきり、二度と起きあがらなかつた。抱き起こしたときにはもう呼吸がとまつていたという。「おーい生とるやあ」で始まる彼の電話の声は、もう聞くことはできない。葬儀に参列しながら彼は本当に死んだかどうか私は怪しんだ。

「生きとるぞー」とか何とか叫んで彼が突如お棺の蓋を開けて起きあがつて来るような気がしてならなかつた。若い頃からそうした類の悪ふざけが好きで、私などは時折やられたものだ。いつまで待っても動

かない彼に私はだんだん熱いものがこみあげてきて、最後まで葬儀に参列する気力が無くなった。私は空をふり仰ぎ太陽に顔を晒して、涙の跡をごまかそうとした。

「おーい生きとるやあ、出て来いよ、旨い馬刺しがあるぞ、福島でポーツとして暮しとると、奥さんから廃品回収に出されるぞう」

「おれは静かに暮らすとがよか」と言うと、彼はすかさずこう言った「死ねば静かになるさ」と。これが最後の電話のやりとりとなった。約束の時間に、遅れてばかりいた彼が、どうして人より早く死んだのだろう。暮れが迫るにつれて、私は改めて彼がいけない寂しさが身に沁み、空白の大きさを知らされた。

この先、私を確実に待っている死が、彼のそれよりましだという保証は何もない。苦しみ抜いて、身近な人に迷惑をかけ、ようやく息を引きとるのかもしれない。静かな人生どころではないかもしれない。

この春、胆石の手術で妻が福岡の病院に入院した。知人の医者や子供の嫁たちが、涙ぐましいまでの協力態勢をとってくれた。主治医の話は簡潔で、やさしさにあふれていた。患者を見る目が暖かく、さわやかな手術の説明であった。孫たちは落ち着かないで不安な様子を見せ、口には出さぬが、まわりの者たちが祈るような気になっているのに、本人はあつからんとして、全く動じた気配を見せなかった。手術の前の夜半に、病室のベッドから落ちて同室の人たちを、笑わせたいらしい。退院の日「お父さん、よかったですね」と嫁が涙まじりに言った。私は声がつまり、黙ってうなずいた。心の中で波立っていたものが、すべて消え去ってしまったような退院の帰り、私はぽつんと言った。「人生って、本当にいろんなことがあるね」。妻はふだんと変わらない様子で答えた。「ほんと、お世話をかけました」。

東海道新幹線ひかり号は、東京と博多の間、距離にして一一八キロを六時間足らずで走る。昔の長旅の面影はなく、桁ちがいに速くなった。良くも悪くも世の中は大きく変わっていく。妻が東京の中野のホテルでの研修会に出席するというので、荷物持ちを志願、お供することになった。妻が生まれ育った東京という土地に対する強い関心が私にはある。翌朝、中野のホテルに妻を送りとどけ、私は上野の国立科学博物館での「桜蘭王国と悠久の美女展」を見学した。館内は大勢のシルクロードファンでにぎわっていた。混雑を予想してか、老人の姿はあまり見かけない。古代の生活に想いを馳せる、熱心な若者たちの姿が印象的であった。

約三千八百年の時を経て、発掘された桜蘭王国の美女のミイラは、顔の筋肉が生前そのままについており、右の目はくぼんでいるが、左の目は静かに閉じており、口は真一文字に閉じていた。下肢を伸ばし仰臥の姿勢で膝から下は毛織物が破れたのか、むき出しになっている。鳥の羽のついたフェルトの帽子をかぶせられ、羊の皮の靴をはかされていて、手厚く葬られていたのがわかる。幸せな女性だったと想像される。

古代の文明、風俗、習慣を研究するためには、考古学の立場から遺跡発掘をしなくてはならないことはいうまでもない。しかし彼女は今になって思いもかけず永遠の眠りからゆり起こされ掘り出されて、はるばる遠い日本に連れて来られようとは、思いもよらなかったことであろう。もしも彼女に心があるとすれば、どんな思いで多くの人たちを観察しているだろうか。

新宿の高層ビルや、銀座街には私はあまり魅力を感じない。古い江戸の面影がいろいろと残っている浅

草や上野が好きであり、秋葉原や築地の魚市場に興味がある。そんな私の意志は口には出さなくても、妻の弟妹たちはわかっていて、ずっとつきっきりで案内してくれた。彼らの好意を強く感じた、心に残るいい旅であった。

命というものはかけがえのないものだということは、誰だって知っている。あばら骨が飛び出し、体にかかるハエを追い払う気力もなく、ただ死を待つ人々、ソマリアの映像には心が痛む。半世紀前、ガダルカナルやボルネオのジャングルでも、多くの日本兵があのような姿で死んだのである。

中国残留孤児の訪日調査をテレビが報道している。生きるか死ぬかの極限状態でせめて子供だけでもと祈って、中国人にわが子を預けた親を誰が責められよう。人生には様々な巡り合わせがあるものだ。いつものことながら、離日する成田での残留孤児たちの後ろ姿には、胸の痛くなる思いをさせられる。

随筆家としていい仕事を次々とされていたM氏が「面白かったこの世」という本を出版した後、忽然とこの世を去った。M氏と一緒に壱岐に旅したことがある。静かな宿の夜、次のような話を私にされた。

自分の葬式に当って、楽しみにしていることが一つある。最後のお別れに来て下さった人たちに対して、お別れの言葉をテープに吹き込んでいるのだが、それをお聞きになった皆さんが、どのようにお受け取りになり、どのような反響をお示しになるだろうかと楽しみにしている。長い間お世話になってきた人たちへの、最後のお礼やお別れの言葉は、自分自身で心の底から申し上げたい。その日聴く人の心にうったえたいという思いが強く働くので、とてもいい加減なことはいえない。涙を拭きながら書き、あのひと、このひとのことを走馬灯のように思い浮かべながら懸命に吹き込んだと。

M氏のお別れの言葉は、葬儀に参列した人々に深い感動を与えたことはいうまでもない。

私は昭和十七年から足かけ四年軍隊にいた。私の人生の最悪の四年間で、もし今一度生れ変わるチャンスを与えられるとしても、この期間の再現だけは免除して欲しいと思っている。唯一よかったことは、軍隊の最低辺の体験をし、人間が極限状態でどのように生きるかを知る機会を得たことである。批判力も定かでないままに、南方の戦場に駆り出されたが、自分とは全く違った生活意識の人たちを多く知ったことである。

人は人生の行路をどれだけ自分の意志で選ぶことができるのだろう。意外と選択の幅は小さいのではないか。まず、親を選ぶことができない。人生の第一歩である出生から偶然である。

私は今になって、若い日のいわば単純な、それだけ純粋な考えを取り戻せるとは思わないが、残りの人生へ向かって進む気力は衰えさせたくない願っている。世の中から無用の烙印を捺される前に、自分なりにやっておきたいことも多少ある。私はどちらかといえば運は悪くはない方だと思っている。戦争でも死ななかったし、戦後もなんとか生き延びた。これからの残り少ない余生を大切に生きたいと思っている。戦争は遠く過ぎたが、わたしたちはなお戦争の記憶を負い、戦後と呼ぶ日々の貧しさを重く曳いて生きて来た。夜中にふと目をさまし、かつての戦場のことを思い出すこともある。三十三回忌をさかいにして、死者は遠くへ去るといわれるが、現実にはむしろ逆であるように思われる。私には、かえって身近に感じられてならない。若くして死ぬことの痛ましさを、胸底深いところで受けとめるようになった私自身の年齢のせいもある。私は両親や妻の父の生前に、もつと丁寧とその昔話を聞いておかなかったことに、強い後

悔がある。このところ、何かにつけて昔を思い起こすことが多くなったその感傷癖のせいだろうか。

生きている限り、死者を思いつづけていく人もある。終戦近くわが子を特攻隊で亡くした老いたある母親は、夏の日の積乱雲を悲しみなしに、仰ぐことはできないと語った。突然やってくる悲しみを、人はみな乗り越えていかなければならない。

七月中旬の暑い土曜日、博多湾に浮かぶ能古島で戦友会があった。姪浜港からフェリーで約十分の短い距離である。船内は海水浴や釣を楽しむ人々が多かった。私は左舵の手すりに沿って櫓の方へ行った。耳元でしきりに風が鳴っている。手すりに頬杖をつき櫓の果てに泡立つ航跡を見るときもなく眺めていた。針をまき散らしたようにキラキラと光る海を見ていると、かつての南方の洋上での様々な悲惨な出来事が、鮮烈な色彩を帯びて私の脳裏に浮かんできた。不幸にして船内で死亡した戦友の髪と爪を切り、封筒に入れた後、遺体を粗末な唐米袋に入れ、海中に投げ入れ水葬した時の海の光と夕映えは、今もなお忘れることはない。

前回は十七人集まった戦友会も、今回は九人となった。戦争では生き残った仲間が次々とこの世を去っていく。

敗戦とともにそれぞれの故郷へ戻って四十七年。考えてみると、我々の人生の中であの当時ほど強烈な生き方はなかった。楽しい思い出とは全く縁のない、余りにも激しく過酷な生き方であった。

一年に一度しか訪れない貴重な一夜を、眠ったりしては悔が残ると語り明かした戦友たちも、別れが近づいた帰りのフェリーでは、だんだん無口になり光る海をじっと眺めていた。八十歳になる交響楽団の指

揮者のEが、「この秋にも海外演奏に出かけるが、海外での指揮は、今年が最後になるだろう」と、寂しく見える顔で言った。私は彼の帰国後に行なうであろう演奏会には、必ず出かけて行きたいと思っている。別れに当たって、いつもより握り合う手に力がこもっている。次回の会合には、誰かが欠けるといふ想いが暗黙のうちにあるのだ。

姪浜駅のホームで見送る私に、戦友たちは手を振った。私も大きく手を振った。この世でのさまざまな活動も終わりに近づいた戦友たちを乗せて、電車は見える間に遠のいて行った。



つるんしゃん

私の生まれたところは伊万里釜で、育ったところは日の浦である。私の故郷福島は五十年足らずのうちに大きく変わったし、今もなお変貌を続けている。

私は最近、島の道路を車に乗せられて走っている時や、ひとりで歩いているような時に、昔この辺は……といやに古いことを思い出すことが多くなった。昔を思い出させるものが、埋められたり、こわされているのを見ると、はっと思うことがある。新しいものが次々と出来る故郷は楽しみであるが、思いがけないものがいづまでも残されているのを見ると、忘れていた遠く去った幼い頃の映像が甦ってくる。「暗くなるまで遊んでいると、人さらいが来るよ」と大人たちはよくそう言ったものだ。サーカスの少年少女たちは、人さらいにさらわれた可哀想な子供たちだとよく聞かされた。当時は食うに困れば自分の娘でも売る時代であつたから、他人の娘をさらって売り飛ばすものがあると聞いても不思議ではなかつた。

義務教育を終えると、口べらし奉公のため、親元を離れ、他人の飯を食う。これはかつての日本社会、特に底辺にあつては見なれた情景の一つであつたに過ぎない。貧しい親は、子に犠牲を強いる以外に生き

る道はなかったのである。

いつの頃からだろうか、海を見ていると妙に私は心が落ち着いた。過ぎし日々を振り返る時、必ずと言っていいほど海の想い出が浮かび上がってくる。学校へ通う日の浦の坂道は長いといっても百米あるかなしぐらいだったが、私はこの坂の上から見る日の浦の風景が好きだった。

子供のころ、日の浦の炭坑につるんしゃんという大変な餓鬼大将がいて、私が小学校へ行く前から勇名を馳せていた。私よりどのくらい年上だったか覚えていないが、彼は上級のお山の大將たちを追い抜いて君臨していた。

日の浦の坂道を歩くと私の耳には今でも坂の上からつるんしゃんの声が自分を呼んでいるような気がする。かつて、この坂の上から彼に呼ばれたら、どんなことがあっても返事をし駆けつけるのが何よりも大切な心得だった。親や先生の言うことをきかない仲間たちも彼の命令には従ったものである。

私に通っていた小学校では宿題がかなりあった。それを言われたとおりにやってこないと、かなりひどい目にあつた。教室に立たされるだけでなく、叩かれたし、よく罰当番をさせられた。こういう教育の方法にたいして、私は今でも別に意見を持っていないが、特にひどいとも思っていない。

あるとき宿題をしてこなかった友達が「頭が痛かったです」と言つた。すると先生は叱らなかつた。それから宿題をしてこなかつた者が黙って叱られたり立たされたりされては損だと思い、いろいろ言い訳を言ってみることが流行した。腹が痛かつたとか、ひどいものになると叔父さんや叔母さんが死んだとか、本当か嘘か私どもにもわからなくなつた。そんなある日、つるんしゃんの集合の号令が下つた。「お前たち、

くどくど言い訳をするのは、男らしゅうなかぞ、叩かれていつちよけ、いいか」と毅然とした態度で言つた。それから言い訳はみつともないと思うようになり誰も言わなくなった。

当時は先生から叩かれても、生徒たちは当然の措置と心得ていて、家に帰つても両親に言いつけたりはしなかった。当時の大人たちは、食べていくために忙しく子供の世界まで首を突つ込む暇などはなかった。その頃の子供の世界は殴ったり殴られたりなどというトラブルは日常茶飯事で、教師も父兄も今のようないちいち騒がなかった。もし子供の喧嘩に親が何か言ったら「子供の喧嘩に親が出た」と評判になり、みんなの笑いものになったものである。

川の向こう側の炭鉱の納屋にケンちゃんという年上の子がいた。彼は幼い時、疫痢にかかり、高熱を發したあげく脳膜炎を併發して、精薄児となつていた。年を加えるにつれて知能の遅れが目立つて行つた。学校に行くこともなく、よく近所の赤ん坊を背に負い、子守をして、にぎり飯などをもらつていた。彼にはにぎり飯を食べる時、一口食べては眺め、ゆっくり味わいながら食べた。そのケンちゃんの小母しやん(母)には困つたくせがあつた。日の浦はガラ土だから、いたずら仲間たちの顔は真つ黒な泥をよくくつつけていた。そんな私たちを見るとつかまえて、あねさんかぶりにしている手拭いはずして、自分の唾をつけて濡らし、顔をゴシゴシと丹念に掃除するのだつた。逃げようと思うのだが出会うとなぜか諦めたような気分になつてしまい、小母しやんのするがままにしていた。

ある日ケンちゃんが真つ赤に熟した山桃の実の着いた見事な枝を、炭鉱の二人の若い衆に取り上げられた。誰かがつるんしやんに報告したらしく、駆けつけた彼が「あんちゃん、それは返してくれんね」と静

かに言った。二人の若い衆はせせら笑った。小馬鹿にしたような目つきだった。つるんしゃんの目が濡れたようにギラツと光った。彼は下駄を脱ぐといきなり「ギヤーツ」と怪鳥のような叫び声を発し、相手の喉元にすさまじい飛びけりを入れた。呆氣にとられた一人にも激しい頭突きを見舞った。にぶい音がして相手はもんどり打って倒れた。それはあつという間の出来事であった。あまりの凄まじさに見ていた私たちは体じゅうが震えつづけ、握りしめた手が汗ばんで指の間を濡らしていた。二人の若者はふらつきながらやつと起き上がり、すぐごと退散した。彼は腰バンドを締め直すとパンパンとズボンを叩き、青ざめた顔をして、小刻みに震えていたケンちゃんに山桃を渡した。

「ケンが死んだぞー」と子供たちの騒ぐ声が聞こえた。私は外に飛び出した。大人たちの話では高い木から落ちた小鳥の雛を可哀想かと言って巢に戻してやった後、枝と共に落ち、間もなく息を引き取ったということであった。雷鳴のとどろく日の出来事だったと記憶している。

ケンちゃんの葬儀は寂しいものだった。大人が五人ぐらいしかいなかった。つるんしゃんは葬列の後からついて行った。土人墓から帰った彼は子供たちを集め、目の前で大きな孟宗の竹筒を鉋で割った。中から一銭・五銭・拾銭が驚くほど出て来た。その銭はつるんしゃんがみんなを使つて稼いだ野球場の草取賃、お稲荷さんや、祠のお寶錢箱から黙つて失敬したもの、正月の十四日にもぐら打ちをして貰った銭などであった。古びた大きな風呂敷に銭を包み、私たちを引き連れてケンちゃんの家へ向かった。

煤けた障子にうす暗い電灯の明りがにじんでいる台所の板の間に包みをドスンと置いた。「小母しゃん、元氣ば出さんばたい、これでケンのために何かしてやつてくれんな」。呆氣にとられたような顔をした小

母しゃんが、しばらくしてから大声で泣き出した。「あんたが、あんたがケンをかばってくれたことは決して忘れんばい」そう言って又子供のように泣いた。

「炭鉾の子供とあんまり遊ばんごとせんばばい」そういう大人たちの声を聞いても、くちびるを噛み、じつと目を伏せて耐えていたつるんしゃんだったが、この時ばかりは眼から涙が溢れ、頬を伝い落ちていた。初めて見る彼の涙であつた。つるんしゃんの家は貧しかったから銭は彼が全部使ったものと思つていた。私たちは、なんともいいようのない強い衝撃を受けた。まだ人の死の悲しみがどんなものか、わかる年齢ではなかったが、小鳥の雛と命を取り替えたケンちゃんがたまらなく哀れであつた。そしてつるんしゃんの弱者をいたわる心情の強さに心打たれた日でもあつた。

潮騒の音がかすかに聞こえる夕べの砂浜に出て見ると、昏れかけてゆく夕光を浴びて、岬の突端にたえずんでいるつるんしゃんの姿があつた。突如、海に向かって「ケーン」と絞るような声で彼は叫んだ。

この日から、ほどなく彼の家はどこかへ転居して去り、餓鬼大将つるんしゃんの姿を再び見ることはなかった。昭和初期、日の浦炭鉾がさびれていったころの想い出のひとつである。



空席の灯

私も年をとった。ボツボツ人生の幕引きが始まっているような気がするこの頃である。当然のことながら人間の体は、そういつまでも長持ちするものではない。六十年、七十年と使つてくると、そろそろ耐用年数が近付き、どこかにガタが生じてくることは避けがたい。

戦後五十年、人それぞれに過去が遠ざかりつつある。戦争が終わつたのは一九四五年だから、今年は満五十年ということになる。だが仏教のしきたりに従うと、あの年に亡くなった人の五十回忌は昨年で、各地で供養が行われた。

終戦後の苦難の暮しは、今やはるか過去のこととなったが、同じ世代なら誰もが味わった強烈な体験であり、その後の人生に少なからず影響を与えたことは、私だけに限らないだろう。最も貧しい辛い時代だったはずなのに、不思議に一面では懐かしい思い出として残っている。戦争と敗戦を境に生き方を狂わせてしまった人は多数存在した。これから世の中はどういうことになるのか、全く見通しが立たなかった。歴史家でも政治学者でもない平凡な田舎暮らしの私には、あの戦争を検証することなどできない。ただ戦争が始まった経緯や、指導者たちとは関係なく、あたらかげえのない命を捨てた多くの兵士たちを犬死扱いにしないことを願う気持ちでいっぱいである。

現在の社会が、戦争という時代を生きなければならなかった無数の人々の犠牲の上に成り立っていることに、改めて思いを馳せてみるのも必要ではないだろうか。

現在の指導者が、外国にばかり気をつかい祖国のために血を流して犠牲になった人々に対する配慮が欠けているのではないか、と思うことしばしばである。

戦争とは悲惨なもので、戦後五十年たつてもなお、終わりはないものだと思つづく。

空の色が濃くなり、赤トンボが飛び交う九月、水郷柳川に戦友たちが集つた。展望温泉でゆっくりと休養をとり雑談の後、宴会場に入った。すぐ目についたのは、海外より輸入した洋蘭を主体にした豪華な花を飾つた中に、特大のローソクを点した一つの席であつた。料理も特別なもので、私は目を見張つた。誰かを招待したのだろうかと思つた。その夜の世話役である病院長のMが静かに挨拶を始めた。

「生き残つた私たちの仲間も次々とあの世へ旅立って、寂しい思いです。私のようなつまらん人間がこうして元気でいて、心やさしい人たちが早く去つて逝きます。あの空席は当地出身の今は亡き不運な生涯だつたS君の席です。だれの身にも死はひとしく訪れるものですが、S君はあまりにも早すぎました。彼のために何かをしたいという思いはあつたのですが、戦後の生きることの忙しさに追われ、何にもしてやれませんでした。医者という立場にありながら、彼の生存中一度も訪れなかつた私、S君ごめんなさい……」と言つて声をつまらせ、後は言葉にならなかつた。真情を込めたMの言葉が会場に流れた瞬間、私たちは感動の渦に包みこまれていった。

Mの言葉は、私を一気に五十年前に引き戻した。戦地から帰国してみると敗戦というものがいかに惨め

なものか、想像をはるかに超えた故国の状況であつた。戦禍に打ちのめされた人たちがちまたにあふれていた。復員の日、私とSは朝暗いうちに起きて、炊事係と交渉し、せつせと特大のにぎり飯を幾つもこしらえ門司港駅へ向かつた。

待合室に入ると苛烈を極めた戦争によるひどい生活苦を感じさせる人々が多く見られた。朝食をすませているが、Sが、まわりを気にしながらにぎり飯を取り出した。すると五歳と三歳ぐらいの顔はすすけて、服はボロボロの明らかに戦災孤児と思われる少女が近よつて来た。二人は黙つてSの前に手を差し出し頂戴をした。彼は驚いて食べるのを止め、にぎり飯を渡した。少女は笑を浮かべコクンと頭を下げた。Sはやさしく頭を撫でた。近くにいた乳児を抱いた貧しそうな母親にも、その頃は貴重なマニラで手に入れたミルクの缶詰、チョコレート類、残りのにぎり飯を「よかったらどうぞ」と惜しげもなく与えた。母親は涙を流しながら何度もお辞儀を繰り返した。私は呆氣にとられ呆然としていた。汽車に乗り込んだ途端、Sは無言で私に頂戴をした。私は苦笑しながら、弁当も、チョコレートも、缶詰も、砂糖も半分渡した。鳥栖駅で降りる彼の肩をそつとたたくと、寂しく見える顔で「さようなら」と言つた。ホームに降りた彼は発車するまでずっとこちらを見ているので、私は胸が妙につまってきた。この時は何でもない時の別れと思つていたが、そのまま永遠の別れとなつてしまった。

彼は名のおつた老舗の和菓子屋の長男であつたが、同郷の詩人、北原白秋を慕い、殆どの詩を暗唱できた。白秋を語る時の彼の目の輝きは、今でも私の脳裏に焼き付いている。また粘土で作つて見せるいろんな和菓子の形態は、あきれるほど美しく見事ですばやかかつた。「生きて帰ることができたら、俺の菓子

を味わってくれよ」とよく語ったものである。

その後の彼について、同郷だったAが話してれたことがある。Sは復員後、幾年も経ないで精神障害者となり、座敷牢での悲運な生活を送る身となった。Sには許婚の人がいた。幾年も生還を祈り待ち続けたSの復員ではあったが、Sの両親がこのような状態だからと、涙ながらに婚約の解消を申し入れた。わが子の幸せをひたすら願う親にとって、仕方のないこととはいえ辛い胸中であつたろうと思われる。彼女は「この人は可哀想なあ、戦争でさんざん苦勞し、やつと復員したらこんなことになって」そう言つて大粒の涙をボロボロ流し、座敷牢の傍にしがみ込んで泣き続けたそうである。それから数ヶ月後、Sは一遍の詩を残して孤独な生涯をひそかに終えた。

戦後日本のすさんだ一時期の、世の片隅のひとつの悲しい出来事である。彼女はその後どのような人生を歩まれたのであろうか。何がSをこのような状態に追い込んだのか、私はあることが頭に浮かんだ。

昭和十九年九月、私たちの部隊も乗船した鴨緑丸が基隆港に接岸した途端「キーン」という金属質の甲高い爆音をさせて、米軍艦載機グラマンが来襲した。ふり仰ぐと、二十数機の黒い機影が急降下して、次々と基地の建物に小型爆弾を落とし、機銃掃射を浴びせ、再び反転して急上昇しては同じ襲撃を繰り返した。退船命令が下り、近くの山に退避した私たちにも容赦なく機銃掃射を浴びせた。グラマンが去った後は悲惨な状況であつた。多くの兵士が無残な屍となつていた。

この日を境にSは無口になつていった。繊細な神経の持主である彼にとってこの出来事は強い衝撃となつたのであろう。再び基隆港を訪れた時、山の中腹に供養塔を立て、あの日の犠牲者の冥福を祈つた。S

が手を合わせ、突如、自作の詩の朗読を始めて私たちを驚かせた。全員静かに彼の追悼の詩の終わるのを待った。

これらのことは、もはや遠く忘れさられた戦場のひとこまであるかもしれないが、Sの心中に深い傷痕となつて残つたに違いない。わたしたちの四囲には、このような過去を持ち、傷心を抱いて生きる人たちもいる。

花を飾つた中で燃え続ける大きなローソクの炎が在りし日のやさしかったSの姿と結びついて、門司港駅での戦災孤児への行動、あの基隆での詩の朗読が思い浮かび、声なき声が聞こえてくるようであつた。遠い日、拒むことのできない赤紙一枚で、家族と別れ、故国を後にした人々、毎年多くの人々から思い出してもらえる戦争の犠牲者もいれば、完全に忘れ去られた人もいる。

床についたのは明け方の四時をまわっていた。腹藏なく話し合える友人というのは、人生においてかけがえのないものだということを、強く感じたこの夜であつた。焦土と化した日本が、これほど豊かな社会を実現しようとは、あの焼け跡に呆然と立った戦友の、だれが予想できたろうか。

翌朝、朝食をすませた後、窓の外を見ると、観光客を乗せた川下りのどんこ舟が行き来し、白い鷺が一羽、川の浅瀬に考え深い様子で立っているのが見える。とても生きては帰れないとあきらめていた仲間が、柳川の地に集い、黄ばんだ写真を見るような思いで、かつての戦場や戦友を偲んだ静かな朝のひとつときであつた。

十時過ぎにフロントに行くと、思わぬことに出会つた。かなりの高額になると思われるSの席代を、支

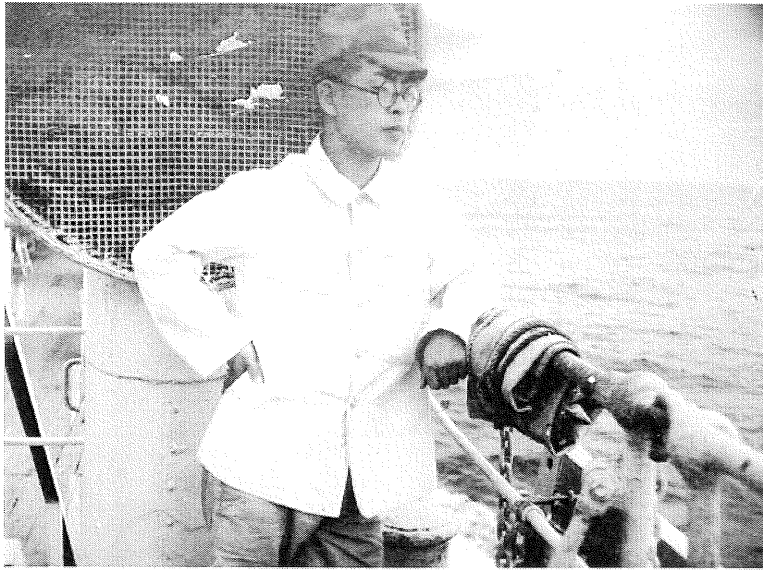
配人が「頂けません」と言うのである。「お気持はありがたいですが、そのようなご迷惑はかけられません」とMと押問答をした。あの席の事情を知っていたらしい支配人は一歩も引かなかった。それで戦友九人、姿はないがSを含めた十人は、フロントの前に横一線に並び支配人に向かって静かに深く頭を下げた。目をうるませた支配人は「この度は皆さんの思いやり、やさしさに触れ、いい思い出になります。私の勝手な言い分を通して頂き、ほんとうにありがとうございます」と言い丁寧なお辞儀を返した。言葉は短かったが感動の気持が込められていた。

柳川を去るにあたって、キラリと輝く、さわやかな人の温かみに触れ、胸にこみあげてくる感動を抑えきれなかった。心地よい余韻を残して支配人は階上へ去って行った。

振り返ってみると、過ぎし五十年の歲月の中、さまざまな出会いと別れがあり、記憶に残る思い出も少なくない。次回の集まりは、台湾の人たちの人情に心打たれた思い出の地、台北ということになった。

いつものことだが、別れが近づくと、集まった時の元氣は失せ、みんな寂しそうな顔になる。年長のFがしきりに目をこすっている。「台北には行きたい。しかしそれまで俺は生きとるかなあ」と心細い声を出した。体力の衰えが目立ってきたF、無情のようだが、大丈夫とは誰も言えなかった。最後に「元氣で」と声をかけたら、うなずいて振り向いた横顔が寂しすぎて、私は胸が熱くなった。

生涯忘れることのできない思い出を心の奥に刻み込んで、ホテルを出ると、柳川の秋空はどこまでも青く美しく、そして高かった。





灯りに想う

海に囲まれた日本の灯台の歴史は古い。平安時代、大陸に夢を馳せて船出した遣唐使のころより、灯台の記録は残っている。

命を賭けて大海にのぞみ、木の葉のように波間に漂い航行した人々を岸边に導いたのは、燃えさかる松明の炎だった。

平戸の港の突端に舟首のように鋭く積み上げられた石垣がある。これがオランダ人が築いた灯台の跡で「常灯の鼻」という。元和二年（一六一六）に築かれたものである。この灯台は正式な灯台でなくても、日本にできた最初のものであると、今は亡き平戸の友は語った。だがその光力は低いもので、平戸の瀬戸の急流を越えて入港する船への便宜にすぎなかったと思われる。しかし夜を航海する人の心にどれだけ安らぎを与えたことだろう。

セブ島から鹿兒島に寄港した私たち船舶部隊は、橘丸（戦後南方インドネシアや方面にて、戦犯容疑で連合軍に捕まる）に乗船、荒天の中を基隆港に向かった。昭和十九年十一月三十日の夕刻だった。

出航して三日後、すさまじい台風に遭遇した。二昼夜にわたる激しい風雨に船体の損傷はひどく、乗船者の殆どが死を覚悟する状況だった。念仏を唱える者がいたが誰も笑わなかった。

空爆や、魚雷の攻撃による死亡なら諦めもつくが、台風による沈没死はいやだ、これでは万歳も言えねえと戦友のAは、荒れ狂う海に向かって激しく文句を言った。私は死ぬ前に今一度母の手打ち蕎麦を食べたい、そんなことを思った。母の蕎麦を打つ姿が臉に浮かんだ。

（蕎麦好きの私は今でも旅に出ると、旨いと評判の店を探して食べるが、土谷や播磨釜の人が作る島の蕎麦より旨いものに出会ったことはない。出雲や信州のものより旨いのだからありがたい。あまり宣伝はしないが私はひそかに島の自慢としている）

十二月七日の未明「灯りが見えるぞー」と叫ぶ、航海士の声が聞こえた。台湾海峡の藻屑を覚悟していた一同にとって、ほのかに見えた基隆の灯台の灯りは、今でも戦友会の語り草となっている。

あの時代を回顧するとき、その時の戦友たちの行動、表情が今もくっきりと私の脳裏に浮かび上がってくる。

旅に出て、どんなに体が疲れていても、どんなに心が弱っていても、あたたかく迎えてくれるわが家の灯りを想えば、ほのぼのとした心地になれる。

もう三十数年も前のことである。島の古老の家を訪ねいろいろ話を伺って、帰路についた深夜のことで

ある。闇夜を歩く私の目に提灯の灯りが見えたので足を速めたその時である。あつという間に溜池に落ちてしまったのである。やつとの思いで這い上がり前方を見たら提灯の灯りが止まっていた。

「あの溜池の前を通る時は、ちよつとでいいから頭を下げるんだよ」と行つた母の言葉を思い出した。誰も見ている者はいないのを幸いに溜池に私はお辞儀をした。途端に提灯の灯りが視界から消え、道路が確認できたのである。

この事実を人は幻影、あるいは錯覚だろうと一笑に付すだろう。だが私にとって現実に体験した忘れることのない事実なのである。あの瞬間、あの場面を想う時、必ず母の面影が浮かんでくる。

今とは違つて私の子供のころはよく停電した。停電になると、母はごく自然に仏壇からローソクを取り出し、皿のふちへ蠟を垂らしてから、そこへローソクを立てた。ローソクの炎のゆれる薄明りの中で、母はいろいろな話をよく聞かせてくれた。幼いころの思い出ばなしや、酒好きだった祖父の逸話、福島舟幽霊など、思い出すままに語ってくれた。死とは、あの世へ行くことであり、あの世とは西方にある遠い世界で、あの世とこの世の間には、三途の川があり、死んだ者はこれを渡っていくと。不意に停電が終わると、母は話を途中で切り上げてしまうのである。今にして思えば、明るい中では照れ臭い話題だったのだろう。私はその続きが聞きたくて、次の停電を祈るような気持ちで待ったものである。日々の生活も楽ではなかった母も、ローソクの炎の中では実に幻想的でいい顔をしていたように思う。母はいつさい愚痴をこぼさなかった。運命に素直に従う芯の強さがあつたのではないかと思う。

貧富や社会的地位、男女の差もなく、人はみな同じように老いていく。真夏日に庭の草を取りながら、

年齢とともに、体力が衰え、持続力が無くなったことを実感するようになった。街中でウインドーに写る自分の姿にハッとさせられることがある。そこにいるのは紛れもないくたびれたひとりの老人の姿である。私は慌ててウインドーから目をそらし、ちよつと寂しい気分になる。

食べて生きていられればいいという戦争と貧困の時代は遠く過ぎ去って、人はそれぞれにいろんな人生を送る。

少年時代に下宿させてもらった年長の従兄弟の病が重いと聞いたのは、昭和四十年の秋ではなかったかと思う。

世話になっていた当時、わが家は貧しく下宿代も殆んど払うことができなかった。そんな私に

「心配せんでいいよ、俺はあんたの両親に若いころさんざん世話になったと、なあんにも遠慮することなかよ」とよく言った。私は家の掃除は勿論、買物、お使い、幼い二人の男の子の遊び相手をした。無類の酒好きだった彼を飲み屋まで何度も迎えに行ったものである。酔ってなかなか帰ってくれない彼に私は幾度も泣かされた。一番辛かったのは、二人の男の子のいたずらだった。学校の宿題をやっている私の後頭を尺竹で叩く、ノートを破る、鉛筆は折る、世話になつていたので我慢するしかなかったが、たまりかねて私は両親が留守の時、次のことをやってのけた。

二人を前にして「どっちが強いかなあ」と言う、僕が強い、僕が強いと激しく言い争った。そこで兄の頭を軽くコツンと打って「うんこれは強い、兄ちゃんがやっぱり強い」と言う、負けじと弟の方が頭を突き出した。しめたと少し強く打って「いやあーこっちが強い」と言う、兄が又頭を差し出した。日

頃の仕返しはこの時とばかり、げんこつの力をだんだん強めていきながら何度も繰り返した。負けん気の強い二人は痛さをこらえ辛抱していたが、あまりの痛さに涙がこぼれ落ちてきた。私は嬉しさで目頭が熱くなった。

以来「どっちが強いかをやろう」と言うのと、二人はあわてて逃げるようになり、私は楽になった。

帰郷した折、このことを父に話したら、叱るのを忘れて声を立てて笑った。母は呆れたような顔をした。

私は二十五年ぶりに川に沿った道をゆつくりと歩いて、彼の家へ向かった。玄関の戸を開けて声をかけると、奥の方から元氣のない返事があつた。うす暗い部屋で彼はローソクを点した仏壇の前に床をとり横になつていた。ローソクの灯りに照らし出された顔は、げつそりとやつれ、かつての生き生きとした輝きはなかった。以前の野生的な印象にほど遠い、弱々しい表情に変わつていた。思いもよらぬ不運な病に見舞われた彼にとつて、私の不意の訪問は大きな喜びだったのだろう。「諭吉さん、よう来てくれたね、酒も飲めんごととなつて、もうお終いばい、あんたが飲み屋に迎えに来てくれたあのころは、よかったなあ、この封筒はなんなあ、えーつ、二十五年前の下宿料！」私が差し出した少し厚みのある封筒を見て、彼は果然となつていた。彼は顔を上げ、流れる涙を拭きもせず私にこう言つた。

「よう顔を見せておくれよ、もう生きて再び見ることもないだろうから、あの世へ行つて自慢話ができるばい、三途の川の渡し賃はいらんだろうが、残つた者が助かるし、ありがたく頂くよ、こがん気持のよかことは久し振りばい、夢のごたる、二十五年前の下宿料なあ、家内が帰つたら驚くじやろうなあ、これ仏壇に上げておくれ」時々、肩で息をつきながらの言葉であつた。私は彼の言葉になん度もうなずき返し

た。苦しみを抑えて実に穏やかな彼の態度であつた。ローソクの炎が静かにゆれている仏壇に掌を合わせると、彼の不運が傷ましく、新たな悲しみが湧いてきた。

奥さんは彼の病の治癒を願つて、神社に祈願に行つていたのである。病氣を信仰心で全快させるなど、およそ非科学的な発想であるがさりとて医術ではよくならないもどかしさを、神仏に祈願する心情は理解できる。

彼の死を早めたひとつの原因は、どっちが強いかの弟の方が若くしてこの世を去つたことにある。この衝撃がいかに大きく深いものであつたかは、その病状が如実に語つていた。

沖縄には門中墓と呼ぶ一族の大きな墓があるとか。罪を犯した者は入れぬことになっている。よき社会人になれと教えているのである。親より先に死ぬ子も、親不孝者としてこの墓には入れない。不憫な思いがするが、体を大切にと戒めているのである。

別れの言葉を交わし外へ出ると、秋の終わりの風は冷たかった。

ふり返つたその瞬間であつた。病の身で窓ぎわに立つた彼が首に巻いていたタオルをとり、私に向かつて深々と頭を下げたのである。ガラス戸越しにこれを凝視した私は、彼のこの世での最後の挨拶を感じた。帰りのバスの窓外はすでに暮れていた。遠くの人家の灯りを見ると、彼の人生の浮沈がまた思われて、もつと早く訪問を思いつけばよかったと、後悔の思いで胸がつまった。



最後の演奏

深夜、トイレに行くためベッドから起き上がった途端、あつと驚いた。周りが全く見えなくなっているのである。ベッドに腰をかけ夢ではないかと何度も確かめた。残りの人生は少なくなってきたとはいえ、いま視力を無くすことはなんとも耐え難い苦痛である。不意にやってきた思わぬ出来事に私は慌てた。どうしてこのようなことが突然起きたのか、私の頭は混乱した。

このままでは妻や子供や孫たちの顔を見ることができないし、好きな本も読めない。旅もできない。いろいろな日常の生活で無器用な私は妻に大変な迷惑をかけるだろうし、子供たちにも心労をかける。一刻も早く眼の手術をやり、なんとか視力をとり戻したい、そう思った。

思いもしなかった突然の不幸に見舞われた自分がほんとうに悲しかった。罰を受けるような悪いことをしたこともないのにと、天を恨む気持だった。

これから先の自分の生きざまがどのようなものになるか、全く見当もつかず、視力を完全に失った場合、私は生きていられるかどうか分からないとも思った。

そして又驚いた。見えない筈である。目を瞑ったままであった。瞼を開けると、何のことはない何時ものように部屋の中のものの確認でき、心底ほっとした。

視力を失うかも知れないと思った時、人間がどのような思いになるか、ということは私の得難い体験であった。

翌朝、このことを妻に話したら、呆れたような顔をして笑った。次になんとも形容しがたい不安そうな顔で私を見た。ボケの始まりではないかと思っただけ、まじまじと私を見つめた。

妻の三人の妹たちは姉思いである。

「姉ちゃんがひとりになると可哀想だから、いつまでも元気でいて下さい」と私に言った。無理な注文である。このため私はボケたくても簡単にはボケられないのである。

とかく人間は身勝手なもので、思い通りにいかないとすぐぶつぷつ不平を言う。冬がくると夏がいいと言いつつ、夏になると冬がいいと言う。やせると太りたいと言いつつ、太るとやせたいと嘆く。大切な総選挙だというのに「あつしにはかわりのねえことござんす」と木枯紋次郎の台詞をつぶやき投票所には行かない。

法要の席で尊光寺や福寿寺のご住職は実にいい説教をされる。若い頃は軽く聞き流していたが、最近では年齢のせいかな耳を傾けることが多くなった。そのとおりでと思うことしばしばである。幾度かお話を耳

にしているうちに、本願寺にお参りして日頃の信仰心の浅いことをお詫びしたい気になり妻と京都に出かけた。

西本願寺は十二棟の桃山時代から江戸時代初期の建物を残していて、彫刻や装飾は豪華・華麗そのものである。一世顕如のとき豊臣秀吉の援助を受けて一五九二年（文禄一年）現在地に建立された。顕如の死後、秀吉は長子の教如をしりぞけて末子の准如を立てた為、教如らは一寺を建ててうつり、いわゆる東本願寺の基を開いた。

知人の紹介のお陰で多くの国宝・重要文化財の数々を若い僧侶の方が付きつきりで案内、解説をして頂いた。ありがたかった。歴史の好きな妻は特に感銘を受けた様子だった。唐門・書院・飛雲閣（国宝）などが強く印象に残った。

「おいでやす」の言葉で迎えて頂いた宿の女将さんは親切で、私ら二人だけの泊り客を気持よく接待してくれた。

私は新聞の死亡欄には大抵目を通すほうだが、最近目立つものに無葬式がある。故人の遺志により葬儀、告別式は行わないと断っている告示に関心がある。死んだら葬式は必ず行うものと昔から決まっていたようなものだから、これは際立った現象である。どうしてこういう現象が目立ち出したのか知らないが、一つには葬式が年を追うごとに形式化したことへの反撥があるのではないかと思う。

戦争体験を共にした仲間が一人、二人とこの世を去ってゆくことは、残ったわれわれ自身も近く死を控えているということを自覚させる。

先頃、戦友のFが逝去した。生前多くの無残な仲間の死を見、放置された遺体を見てきたFは、自分の葬式などもっての外と言っていた。出身大学の附属病院への献体、香儀献花などは堅く辞退の旨を遺言していた。

僧侶の読経も献花もない彼らしい最後だと思っではいるが、残ったわれわれ仲間はいくつもない寂しさで胸がつまった。生前の彼のあたたかい感触を思い浮かべ、静かに冥福を祈るだけだった。人間世界の多くの喜びも悲しみも、何年か経てば変わってくるものである。死別も幾年も経つと悲しかった記憶も少しは薄れてくるとは思うが……。人間は生まれた瞬間から死にむかって旅をしているようなものだ。一人の人間が生涯を終えるということは当人にとっても周囲の人間にとっても大変なことである。

三途の川を辞書で見ると「人が死んで冥土に行く途中で渡るべき川・生前の行ないの善悪によつて渡る瀬がちがう」とある。

私は尊光寺の門徒である。現在のご住職のあの川の流れのような見事な読経を聴きながら、三途の川があるとすれば渡って行きたいと願っている。そのためにはなんとしてもご住職には健康を回復して頂きたい。歳をとると出来なくなることが少しずつ増えてゆく。悲哀を感じるがそれも仕方ないことだと思っている。

昨年六月二十二日福岡市郊外のホテルに集まった戦友は八人。これが最後の宴となるだろうと、口には出さぬが皆内心想っていた。若い人が聞いたら何のことかわからぬような思い出話をして懐旧の情にひたった。

♪死すべきときに死なざれば………という軍歌の一節が、いまさらのようにズキンときて、その惨さに胸を衝かれるような話も出た。

病院から駆けつけたKがホールでの宴の半ば、盃を置き立ち上がってこう言った。

「みんなもわかつていると思うが、次の会まで自分は生きてはいないだろうと思う。そこで私からの願いをひとつ、きいてもらいたい。幸いにこの大ホールには立派なグランドピアノがある。かつて、一発の爆弾で瞬時に十八名の仲間が犠牲になった基隆を出港する時、S君は泣き乍ら船上で送別のハーモニカを吹いた。

現在S君は一流の音楽家として海外でも高い評価を得ているが先に逝った多くの仲間の鎮魂と、余生の残り少なくなったこのメンバーの為に、今日はあのピアノで演奏をして頂きたい。自分にとっては間違はなく最後の機会と思うし、ベートーベンやバッハとかは縁の遠い者もいるので曲はやさしいものにして欲しい」。

Sは途端にきびしい顔付きになり大きくうなずいた。彼は筑豊の炭鉱の貧しい家に生まれた。少年時代の楽しみといえば、年老いた鉱夫から貰った一本の古いハーモニカを吹くことだった。出入りの多い炭鉱の町である。仲のよかった友との別れに、餞別の金のない彼はハーモニカを吹いて友を送った。彼が一番悲しかったことはハーモニカがこわれて吹けなくなった時、一番嬉しかったことは近所にいたA子ちゃんが、関西方面に転出の時に、一本の新品のハーモニカを無言で差し出し、につこり笑った時だったという。彼女の家も同じ貧乏だった。ハーモニカを買うために、近所の家のお使い、子守など彼女がどんなに苦勞

したか、それを思うとたまらなく切なかった。小学五年の秋だった。

彼は泣きながらA子ちゃんのために別れのハーモニカを吹き続けた。その頃から筑豊地方の人々に、ハーモニカ小僧と呼ばれるようになり、多くの人に愛された。

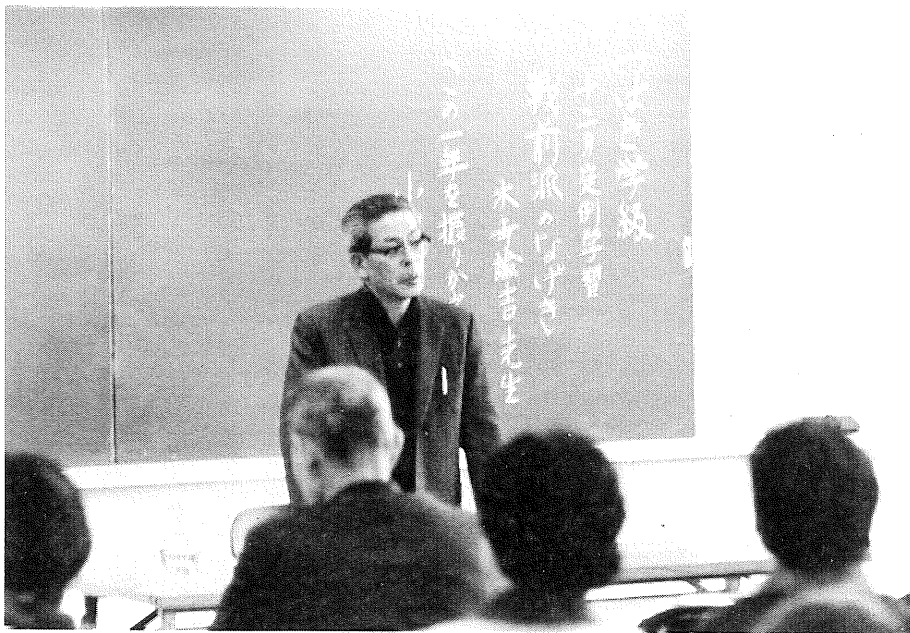
彼の家の仏壇の、亡くなった奥さん（A子ちゃん）の写真の横に一本の古びたハーモニカがある。七十余年も前のものである。辛い時代も音楽を続けてこられたのは、A子ちゃんの支えがあったからである。彼は時折、この古びたハーモニカを撫で涙することがあると、彼と一緒にわが家を訪れた太ったソプラノ歌手は語ってくれた。

ピアノに向かって歩くSの姿は別人のような感じだった。赤とんぼ・宵待草・赤い靴・荒城の月と彼の演奏は続いた。ホールにいた大勢の人は驚いた。演奏者がただ者でないことは、すぐにわかったようである。あの基隆の船上での演奏と同じように涙を流しながらの弾奏だった。演奏が終わるとホールにいた人々は思いがけない一流の音楽家の絶妙の演奏に、総立ちになり一斉に拍手をした。いつまでも鳴り止まぬ拍手に、Sはふたたびピアノにむかった。

かつて、われわれがよく口にした哀愁のある軍歌のメロディーが、ホールに響いた。仲間は昔を偲び胸を熱くした。大きな感動の波が身体中を駆けてゆくのを押さえられなかった。

演奏を依頼したKの眼から、涙がとめどなく流れていた。

Kはいま、大学病院のベッドで意識不明となったままである。彼にとっては、予言どおりこの世で聴いた最後の演奏となったのである。



あの日あの時

このごろ、自分がつくづく父に似てきたと思う。洗面所で鏡を見るとときなど、父に会ったような気がして、思わずはっとすることがある。

似てきたのは顔だけではない。いろいろな物事に対応する考え方までそっくりではないかと思うようになった。

復員したころは「生死」について深く考えることもなかったが結婚して子供が生まれると、何としても妻や子のために生きていこうと決意し、簡単に死ぬわけにはいかないと思うようになった。

病氣になったことのない人は、病人の苦しみはわからないという。それはおそらくそのとおりに違いない。

富める人は貧しい人の気持ちはわからないだろうし、親の気持ちも子は本当の意味で理解できないだろう。

う。

だれの身にも、死はひとしく訪れるものである。しかも、それはいつとも知れぬものののに、私たちは、とかく死について深く考えることを恐れて避けたり、あるいは生きることの忙しさにまぎれて忘れていたりする。考えたくはないことだが、死について話し合うなど、どうも縁起が悪いと敬遠されがちだが、親子も夫婦も兄弟姉妹も、どのような運命のいたずらで、永遠に会えなくなってしまうかわからない。

いままで、かなりの知人が、この世を去って逝った。

知っている人が死ぬ度に、自分のまわりに一つずつ風穴があいていくような寂しさにとらわれる。だが同じ知人の死でも、自分と同年代の人の死は、単なる寂しさをこえて、ついにわれわれもそんな年齢になったのかという感慨にとらわれる。まだ遠いと思っていた死が、近くにきていることを自覚させる。

かつて、戦時中自分たちはいずれ間近に死ぬものと覚悟していた。自分の二十歳から先の生を想像することはできなかった。今このときしか自分たちの生はないという覚悟をせざるをえなかったのである。そのため当時のことは今でも痛切な記憶として残っている。

わたしたちの世代はまだ戦争による犠牲者の思い出を持っているからいいが、その者たちが次第に消えていったら、もう死者にとつてこの世に知っている人間はいないわけである。化けて出ようにも出る先がないので、戦争の記憶はそこで絶えてしまうのであるうか。

青年期をようやく迎えた程度の自分たちは、激しい日夜の訓練に疲れ、強い郷愁をおぼえたものである。日本が敗戦という奈落へ急速に転がり落ちていく事情などまったく知ることもなく、ただひたすらに勝

利を信じていたのである。

海軍工廠に勤務していた当時、ある海軍将校が私にこんなことを笑いながら言った。

「本寺が戦争に行くことになったら、日本もしまいじゃな」

それから数日後、私に召集令状がきて、職場でちょっとした話題になった。

現在は赤紙一枚で召集されることもない。機関銃や小銃の弾もとんでこない。爆弾も落ちてくる心配もない。竹槍(たけやり)で本土決戦にそなえる必要もない。この点では平和といえるだろうが、最近の暗いニュースの連続で気が重い。この世の中が将来どう変化していくのか、皆目見当がつかず、不安な日々を送っている人は多い。

桜の花というのは、花のひとつを手にとつて見ると、淋しい感じのするものである。それが群をなしてたくさん咲くと圧倒的な美しさを感じさせるが、散りゆく様を見ると何かはかない思いがするものである。若いころは生きるのに忙しくて花に心をやる余裕などなかったが、人生の半ばを過ぎたところから毎年春になると自然に花が待たれるようになった。

日の浦公民館の前に見事な桜の木がある。三十九年間、地区の人たちの喜びや悲しみをじっと見ていた桜である。

町長の田中さんが若かったころ(昭和三十四年)日の浦を去るに当たって、名残りを惜しみつつ植えたものである。

四月の地区の総会の度に、咲き誇っているこの桜を見ながら、はたして来年もまたこうして花を見るこ

とができるか、という思いがきざしてくる。

花二逢フコト、アト幾回ゾ (蘇東坡)

という気分になっているのである。

「貴様と俺とは同期の桜」

戦中派の男性たちが酒を飲んでよくうたった歌である。

「咲いた花なら散るのは覚悟」

「みごと散りましょ国のため」

この歌の背後には別れとか、散るといった心情がある。多くの若者がこの歌をうたって、死地へ向かって行つたのである。

これらの多くの尊い犠牲の上に、今日の社会はあるのだ、ということを経験した人々にわかってもらえたら、散つて逝つた人たちの何よりの供養になるのではないだろうか。

桜はわが国の代表的な花とされてきているだけに、文学・美術その他の風俗に数かぎりなく現われている。らんまんとか咲いたのちは未練なく散りはてる桜の花の特徴は、国民性の形成に、大きな影響を与えたのである。古来桜に関する物語・伝説は枚挙にいとまがない。

私たちは実にさまざまな別れを経験している。何でもない一時の別れと思っていたものが、そのまま永遠の別れとなつてしまった場合もある。

去って行くものが自動車、電車、飛行機などの場合はお互いの姿が早く見えなくなり、その場合はあっさりと言済まされることになる。だが船が出て行く時は、実にゆっくりと港を離れて行き、寂しい感じを強く味わうものである。

中国の詩によくある別れも「野崎村」のおそめ久松にしても舟が使われている。別れというものは、生別にしる死別にせよ、こよなく悲しいものである。

昭和十七年十一月十七日の夕刻、私たちの部隊が乗船した輸送船マニラ丸（二万トン級）はラバウルに向かって宇品港の岸壁を静かに離れようとしていた。

演説好きの古参の兵長が、われら初年兵を甲板上に集めて、「お前ら、よく見ておけ、これが内地の見納めになるぞ、まさか生きて帰れるなどと思っている奴はいないだろうな。生きていてもたいして役に立つようなお前らではないから、南方の海の魚の餌食にでもなれば、名誉の戦死ということになり、親孝行ができるというもんだ。親より先に死ぬのはちよつと辛いかも知れんがそれが戦争というもんだ。わかつたか、ようし休憩」そう言つて胸を張った。半ばやけ気味のようにとれた。

背後の足音に気がついたのはそのあとだった。温厚な隊長がやって来て「おい木寺」と言つて岩壁の左側方向を指差した。疲れてかすんだ眼をこすり、じつと見ていた私はアツと驚いた。思いがけない父の姿があった。船の出航は軍事機密である。どうして父が見送りに来られたのか、私は呆然となった。

隊長の特別の計いであると気付いた。将校と兵隊という関係を抜きにして、私はこの隊長が好きで、人間的魅力を感じていた。われわれの部隊はこの隊長の的確な判断で死地を脱したことが度々あった。復員

後もずっと交友が続いたが、その彼も先年亡くなり寂しくなった。

岸壁にはほかに人影はなかった。世間知らずの取柄のない末っ子の私との最後の別れに、日々の生活も決して楽ではないのに、福島からはるばるやって来たのである。

宿はどうしたのだろうか。駅の待合室で一夜を明かすのだろうか。そんな思いで胸がつまった。

これで二度と父に会うことはないだろうと思い、父と過ごした日々が堪えがたいほどあざやかに胸によみがえってきた。

父は数年前から時折身体の不調を訴えることがあった。いつまでも元気だと思っていた父は、確実に老いていることを、その姿に見せていた。わたし達父子は、遠くからではあったが見つめあい、無言のまま相手の心中を思い遣った。

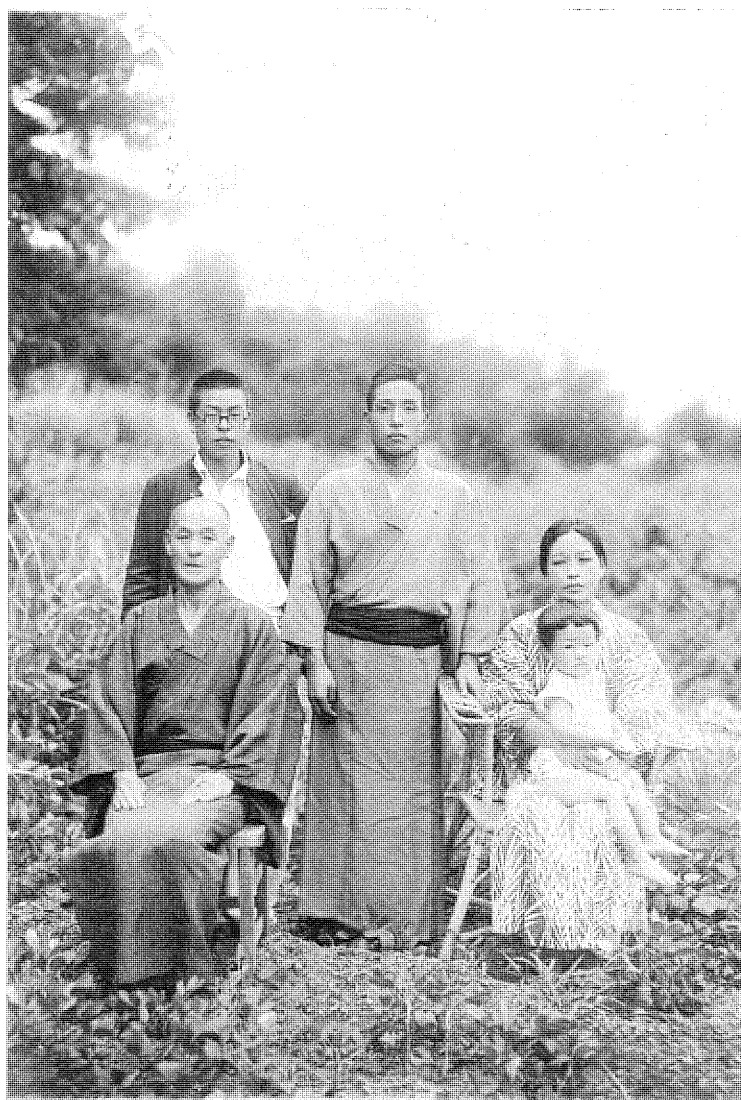
かつて私を優しく戒めた父親の姿が一気に浮かび、親孝行らしいことは何一つしなかったことが悔やまれてならなかった。

父にもいろいろな人生の起伏があったに違いない。あと何年父は生きられるだろうか。不意に私の唇はふるえ涙が頬を濡らした。

私の姿が眼に入っただけであろう。父は挙げた片手を力なく振った。隠し切れない疲労を体に見せていた。やがて引きずるような足どりで父は岸壁から離れて行った。戦時中とはいえ、こんなに強烈な感動で涙と共に見送ったのは初めてであった。青春の感傷というにはあまりにも生々しく、私の脳裏に焼きついて消えることのない別れであった。

遠ざかる父の背に、その日はじめての陽の光りが静かにさしかけて来た。

今は死んでこの世にいない父に、この時の気持を尋ねることはできないが、それ以来、港を離れていく大きな船を見ると、あの日あの時の夕陽を背に浴びた寂しげな父の姿が目に見え、目頭が熱くなってくるのである。



涙の顔

柳に風折れなしというが、幼いころから貧弱な体つきわりには、これといった病氣もしなかったが、とうとう診察を受ける破目になった。子供の運転する車に乗って福岡市内の病院に向かいながら、さまざまに思いが交錯した。

人は必ず老いるのであり、老いれば若い時のような具合にはいかず、どこかに悪いところが出てくるのは当然だ。人は病から癒えることはできても老いからは逃げることはできない。老いた肉体を現代の精密検査機の前に置けば、どこかに必ず悪いところ、機能しないところが出てくるはずである。

診察に必要な書類を全部記入して病院には子供の嫁が待っていた。まごまごしている私を総合受付から診察科の受付、各検査室へとテキパキと連れまわった。

この総合病院の待合室には外来患者やその家族がずらりと辛抱よく待っているのを見て、どうしてこの世にはこんなに病人が多いのだろう、私は今更のようにそう思った。いずれも先輩患者からいろいろ話を聞いたのだろうか、不安な表情をしている人が多かった。

四時間に及ぶ各種の検査結果の資料を前に主治医から七日後の入院を告げられた。なにしろ私は生まれてこの方入院というものを一度も経験していない。近親や友人知己の入院を見舞ったのは数多くあるから、病院がどんなところかぐらいは知っているつもりだが、自分がその身になるのというのでは大違いである。入院の翌朝、六時に起き、洗面所の鏡に映る臉のすこし脹れた自分のなさけない顔を眺めながら、残りみじかい人生の貴重な日々を病院のベッドで過ごすことになったことが口惜しかった。

手術前に主治医から

「家族の人を呼んで下さい」

と言われ、もしやという連想が浮かび、少々気が怯んだ。妻や子供たちがすぐにやって来て、心配のあまりかなり具体的な質問をしたようである。万一の場合にも決して異議は申しません。という、誓約書に捺印させられる家族の気持ちには複雑である。

手術の前日、総婦長らしい人がやって来た。

「明日、手術ですね。体の具合はどうですか。手術は先生と患者、看護婦が一体となつて病気に立ち向かう戦いだとは私は思っています。手術がすみましたら、笑顔で又お話しができることを願っています。フアイト！」

そう言つて小さくガッツポーズをして見せた。

医師と患者、看護婦の執拗なまでの生への執着が、奇跡の恢復をもたらし、手術を成功させることもあ

ることを、私は教えられたのである。

移動寝台に乗せられ手術室に入ると、マスクに手術帽をかむった主治医ともう一人の医師、それに二人の看護婦がいた。

「木寺さん、頑張りましょう。緊張していますね。大丈夫ですよ。二時間ぐらいですみますからね」
やがて麻酔がきいて私は夢心地になってきた。こんな辛い思いをするのは自分でよかった。妻や子供たちでなくて本当によかった、そう思うことで心が落ち着いていた。

私はこのまま目が覚めないかもしれないとも思った。棺の中に寝て花に覆われた自分の姿が頭に浮かんだ。

「木寺さん、木寺さん、すみましたよ」

主治医の先生の優しい、いたわりの言葉が心地よく耳を打った。

移送寝台で手術室を出ると

「お父さん、お父さん、すんだよ」

朦朧とした意識の中に、声が聞えた。妻や子供たちの心労を思うと自分の体の痛みなど問題ではなかった。二度目の手術後、又家族が呼ばれた。手術後の検査資料を前に主治医の先生の詳しい説明があった。手術の成功を喜ぶ医師の言葉もあった。妻が立ち上がって

「先生、この度は主人を助けていただき、ほんとうにありがとうございます」そう言って深く頭を下げた。

自分の体のことは自分が一番わかっている、という妙な自信は吹き飛んでしまい医師が頼もしく感ぜられた。三十一歳の青年医師の顔が輝いて見えた。

私は知らなかったが、二度目の手術に際して、出血多量で死ぬ恐れもあることを告げられていた家族の安堵は大きかった。

入院生活は目に映るもの、耳に入るもの、すべてがそれまでの日常からかけ離れている。

博多の街の人情や、いろんな職業の人の暮しの明暗、夫婦や親と子、老人の孤独など病院では垣間見ることが出来る。どんな時代でも親は子を気づかわざるを得ないし、無理解な上役に対する不平など、さまざまな人生の哀歓を見ることがある。

規則正しい毎日の生活や、ささやかな助け合い、励まし合いを通して、一種の温かい連帯感が生まれていることに私は気付いた。

手術や病気の悪化に伴う、それぞれの不安感、そんなものを隠せない日もあったが……。患者に見る人間模様はさまざまである。

元土木建築会社の社長をやっていたEさんは、かつて多くの部下を引き連れて柳橋あたりでの豪遊はかなり有名だったらしい。彼は退院の日の朝食後病室を去ると思ったが、夕食がすむまで病室にいた。入院費はすべて夕食までの計算になっているので帰宅しなかったのである。退院する彼をエレベーターまで見送ると恥ずかしそうに

「昔と違って千円の金も無駄にできない今の自分があわれですよ。生きていれば又いいこともあるだろ

う。そう思っています」

そう言つて寂しく去つて行つた。

又病氣が治つたとはいへ、体力もなく、金もなく、すぐる知己もなく帰る職場もない荒涼とした孤独な人生を歩まねばならないような人もいた。

入院中、何ともいいようのない不安に胸をしめつけられるのを感じる人は多い。わずかな言葉のやりとりや、動作にそれが現われる。

病が癒える日が来るかもしれない―そうした思いがかすかに胸をよぎり、癒えたのちのことを心に思い描き、夜半の病床に覚めている重症の人もある。

入院していると死は年の順ではないことを思い知らされる。死は身近な存在となつて、死後の世界なども話題になる。

今夜、博多の空を彩る花火大会があるというので、五階の屋上に出た。隣にいたAさんが話しかけてきた。

「私は五回目の入院ですよ。治る見込みのない自分はどうやって、死ぬまでの時間つぶしをやつてるよなもんですよ。来年の花火大会はもう見ることはないと思うと、やはり哀しくなりますよ。木寺さん、手術は痛かったですか、痛いのは生きてる証拠ですよ。退院も近いでしょう。よかったですね。遠い所から通院されるのは大変でしょうが、優しい奥さんや、子供さんのためにも頑張らんばですね」

高熱による息苦しさ、手術の後の眠れない夜の疾病、危険な経験をなめた後に、今なお生命が終わらず

にいるという共通感から話は続いた。

辛かった点滴が終わり、その解放感から一階の待合室へ行き冷たい飲物を味わった。ちよつと玄關を出て、外の風景を見ていたら、退院する中年の夫婦が七階の病院を見上げていたが、建物に向かって深々と頭を下げた。目にはうつすらと光るものがあつた。その理由はわからないが、命を助けてもらったという思いからきた行動ではなかつたらうか。

いまでも私の心に残る、はじめて見たじんとくる光景であつた。

入院中、私と風呂場でお互いに背中を流し合つた大工の棟梁の奥さんは、毎日夕方顔を見せた。

「あんたあ、先生といま会つていろいろ話を聞いたら、手術と言われて青うなつてビビツたつてね。男じやろうが、ビクビクしなさんなよ。わたしや、一日中バタバタやつとるとに、あんたはベッドでゆつくり寝とるとじやろうが。どりやどけんね」

そう言つて主人をベッドから下し、自分が横になつて間もなくすやすやと寝てしまった。棟梁は椅子に腰をかけ、彼女の足を静かにやさしくもんでいた。

棟梁の二回目の手術は、五時間を越す大きな手術であつた。手術室の前の廊下を奥さんは行ったり来たりしていた。彼女の眼から吹きこぼれるように涙がしたたり落ちていた。通りかかった私の姿を見ると、蒼ざめた顔で、

「うちの父ちゃんが可哀想かあ、私が代わつてやりたかあ」

そう言つて流れ落ちる涙を拭こうともしないで、深い溜息をついた。普段の口調とはまったく別人のよう

な、情愛溢れる言葉であった。何かやさしい言葉をかけてやりたかったが声にならなかった。

その後、自宅療養となった棟梁を見送る私に

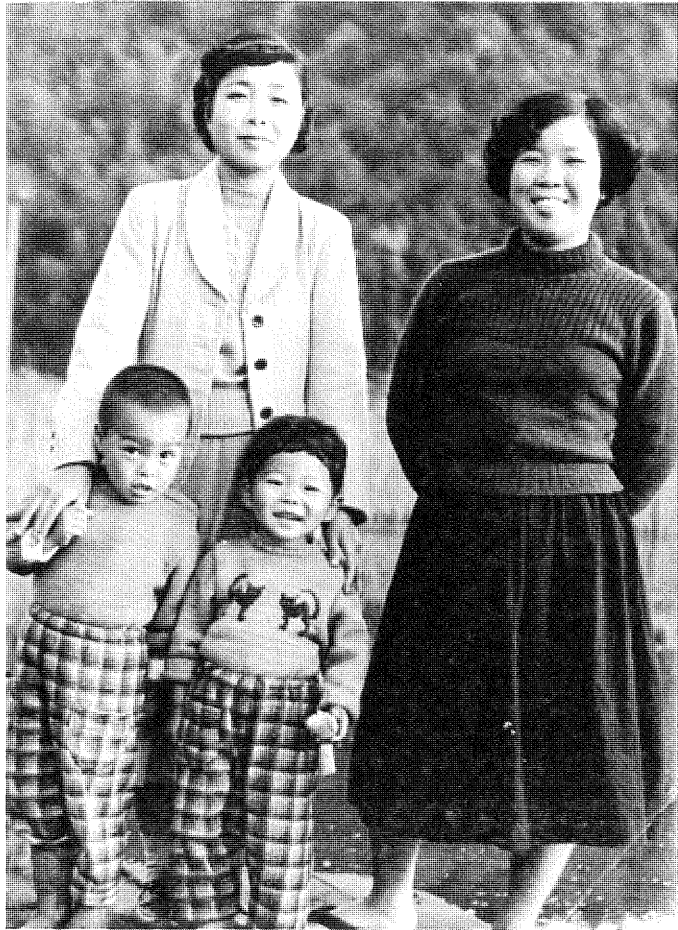
「木寺さんが住んでいる島の沈む夕陽を、母ちゃんと一緒に見に行くことを楽しみにしていたが、多分その日はもうやってこないのではないかと思いますよ」

そばにいる奥さんがそれを聞くと、憔悴した頬に涙を流しながら泣いた。棟梁はやさしく彼女の肩に手をやり

「母ちゃん、泣くな」

そうつぶやくと深い溜息をひとつ吐いて、背を向けてあるきだした。

小柄な体がゆっくりと離れて行くのを私は見送った。車に乗り込む二人の背を弱い日射しが照らした。病むものと、それを看とるものとの映画のワンシーンを見るような、胸に迫るものがあつた。





待合室

病との闘いが始まって二年近くになる。どんな高価な物より家族の愛、自然の恵を受けること、これほどすばらしいものはないと痛感しているこのごろである。

いま世上では、医療をめぐるさまざまな問題が話題になっている。

今後、医療技術がいかに目覚ましい進歩を遂げ、また制度そのものがいかに整備されようとも、究極のところは医師と患者との温かい人間性に裏うちされた信頼関係こそが、基本ではなからうかと思う。

多くの人に慕われる医師は、たんなる医者以上の真率な人間の味があるからだと思う。

旅をして心に残るのは、名所旧蹟でも何でもなくて、人々と接したときの人間的交流であるように……。とにかく人間、この世に生まれてから死ぬまで、苦労は絶えないにしても、生き続けていれば嬉しいこともある。

×

×

×

病院の待合室は、世の中の一つの縮図をかいま見ることでできるところである。年配の男性で必ず夫人同伴で病院へやって来る人はかなりいる。看護婦さんが

「熱は、せきは、」

との問いに返答するのは、患者ではなくて奥さんの方である。夫は口のきけない人のように黙っている。採血ともなると、上着を脱がせ、腕をまくるのも妻である。名前を呼ばれると妻が「ハイ」と答え二人で診察室へ入って行く。医師の問いに答えるのは、すべて妻の方である。各検査室には、妻は入れないので不安な表情で外の廊下で待っている。

若い夫婦の場合、妻のちよつとした病氣でも、夫が付き添ってやって来る。問診に答えるのは夫の方である。

近くにいた紳士が

「男はもつとしつかりしてもらわんなあ」

とつぶやいた。何人かの男性が手を挙げ

「賛成」

と言ったら、近くにいた看護婦さんが声を立てて笑った。

×

×

×

通院していると入院生活を共にした人と顔をあわせることはよくある。その人たちは私の容態を尋ねることはなく

「奥さんはお元気ですか」

と必ず言う。私の入院中、妻は昼食の弁当を持参して毎日やって来た。病院食の私と一緒に食事をした。妻がちよつと遅くなると、同室の仲間は

「今日はまだこらっさんね」

と言い、妻の姿が見えると

「ああ、こらした、こらした」

と安心したような声で言った。私が世話になるので同室の人たちに優しく声をかけていた為だろう。

同室だったDさんは、下着を裏返しに着るくせがあった。縫い目が肌に触れるとゴロゴロするというのだ。人には見えるわけでもないからいいだろうが、靴下の場合は人目につくのでやめた方がいいと言ったら、残念そうな顔をした。

かつて知人の入院を見舞いに行くと、ゆったりと寝ている患者がうらやましくて、自分も一度は入院してゆつくり寝てみたい、そう思ったものである。しかしいざ病んで入院し、ベッドに横になってみると、病床というものは楽ではなく、一つの苦行であることを思い知らされた。特に手術後は自力では体を動かすことが全くなかった。

人は笑うかもしれないが、私の秘かな願いであった、平戸の松浦藩のある下級武士とその妻の、壮絶な生と死を扱った時代小説「峠の風」（仮題）を少しでも書き進めるチャンスと思っていたが、全く書けなかった。

十二年ほど前、松浦藩の一族の子孫である友人と平戸の山中で、不思議な形をした墓石らしいものに出合った。友は切腹を思わせるなど言い、興味を示した。その後二人で多くの資料を調べた。三年に及ぶ調査で漠然とはあるが、あることが浮かび上がって来た。そんな折、友の突然の死で中断したままであった。才能がないのは承知の上で、小説の形をとって、あの墓石の主らしい下級武士のことを書き残したい、そう思っているのであるが……。

人生の中で、私たちが経験する別れというものは、さまざまなものがある。

またいつ会えるかわからないというのは、特に親しい人との間では、不安であり、ふと永遠の別れという感じを秘かに抱いてしまうようである。

遠い東北の地へお嫁に行く娘さんが、病室のFさんを訪ねて来た。幼くして母と死別、長い間父と二人きりの生活で家事を続けてきた娘さんである。

彼の胸中に、泉のようにあふれるものがあつたに違いない。彼は生きて再びわが娘の顔を見ることもうないだろう、そんな思いからか、感情を押さえ、眉間に皺を寄せ、早口に言った。

「いろいろと長い間、世話をかけてすまなかったな。わかつていると思うがもう俺も長くはない。どうか幸せになってくれ。大事な結婚式に出席できなくて本当にすまない。親らしいことは何一つしてやれなかったなあ」

彼は言い終わると同時に、両手で顔を覆った。そして娘さん名義の二十数年に及ぶ預金証書類と印鑑を差し出した。娘さんは驚き声を出して泣いた。



やがて娘さんは泣いた痕が残っている顔で寂しげな笑みを浮かべ、小さく手を振って、ゆっくりと背を向けて歩きだした。
振りむきたい気持ちを押さえているためか、彼女の肩は小さくふるえていた。

山芋

旅行の好きな仲間と話をしていると、なかなか面白い。再度行きたいという所の一つに、必ず日光がある。私も賛成である。

日光東照宮には徳川家康を主祭神とし、豊臣秀吉、源頼朝を合せ祭ると辞典にあるのを見て、急に興味が湧き、出かけたことがある。

五十数棟の建築は見事という外はない。然し私が再度行きたいと思うのは外の理由である。羊かんが欲しいのである。「祢りようかん」と呼ばれる本練りの羊かんは、十勝産の小豆を使い、砂糖だけで練り上げたもの、石臼や薪を使う伝統的な製法は、明治元年の創業以来、変わることなく守られ続けられている。また製法だけでなく、売り方にもこだわりを持ち、一人一本までの販売である。数にも限りがあるため、早々に売り切れてしまう。そのことから日光で買えないもののひとつと言われている。

一本千五百円だがさして大きくはない。私はこの羊かんが欲しくて日光に行きたいのである。あの味が忘れられないのである。体調がよければ今一度出かけて、羊かんを手にとりたいと願っている。

博多の名物といえば辛子明太子であろう。多くの製品があるが一番旨いのはどの品か、最近やっと探し当てた。小さな店だがとにかく旨い。

漬物といえば京都が有名だが、奈良・名古屋の外かくれた品が各所にある。私が好きなのは、茨城県取手市の鉄砲漬である。年に何回か知人が送ってくれるので、感謝している。

菓子となるとなかなか選ぶのが困難である。京都・松江の外数多くある。忘れてならないのは、埼玉県熊谷市の五家宝である。絶品である。年に二回知人が送ってくれるのが嬉しくて仕方がない。

そば好きの私を池波正太郎の小説で有名な浅草のそば屋に知人が案内してくれた。しかし驚くほどの味ではなかった。松江の出雲そばは、だしが極上であつたと妻は言った。現在は福岡の大濠そばで我慢している。

うどんは四国である。高松の空港からさして遠くないところに古い店があつた。現在はどうなっているのだろうか。

航空賃を払っても惜しくないほどの旨さだつた。も一度訪れてみたいと思っている。

セブ島の船舶司令部に待機していた当時のことである。初年兵のEが病に倒れた。もう幾日も、めしも乾パンものどを通らず寝たままだつた。

眼はくぼみ、頬の肉は落ちていた。額に手をあてると、ひどい熱だつた。私を見つめる眼には涙が見え、そう長くはないだろう、そんな予感がした。

原地の少年に、煙草ハンカチなどをやり、パイパイを手に入れ差し出したら、驚いたことに食べることに

ができた。パイヤだけはのどを通ったのである。

いいパイヤを毎日手に入れるのは容易ではなかったが、若くして食うものも食わず、死んでゆくのは哀れと思い、私は全力を尽くした。

十日後にはうのように体力が回復した。起き上がった彼が手を合せて私を拝んだので、「やめてくれ」と叫び、その場から逃げ出した。

古い兵が初年兵の世話をするのは当時は珍しく、話題にもなった。

終戦後四十年を経て、彼が突如わが家を訪れた。しっかりと私の手を握り、ただ泣くだけの彼だった。海外にも度々出かける一流の音楽家になり、世界的ジャズ・ピアニストの山下洋輔氏を始めかなりの音楽家を育ててきている。彼と同道して来たソプラノ歌手は私達の会話を聞いて目を赤くしていた。

果物店・スーパーなどでパイヤに出会くと、必ず合掌をする彼である。あの時のパイヤの不思議な力に、いまなお驚いている私である。

小学校から中学校へ転出して驚いたことは、給食用のパンが一個から二個になったことである。一個でさえ完食することが出来ずに困っているのに頭の痛いこととなった。

日頃は優しい給食担当の養護の先生が、給食の時間になると、チラリ、チラリと私の方を見るので、随分と肩身の狭い思いをしたものである。

生徒の中にも私と同じような者がいて、厳しい指導を受けていた。C少年もその中の一人である。

休日のある日、レストランに入ったら家で収穫した野菜を納入しているC少年を見た。用件が済んだら

しい少年をテーブルに呼び、私と同じものを注文してすすめた。だが全く食べないので別のものを追加注文した。しかし珍しそうに眺めるだけで食べようとはしなかった。

奥の方で小母ちゃんが手招きするので行くと

「あの子がなぜ料理に箸をつけんとか、わからんのですか。学校に勤めていてそれぐらいのことがわからんのですか。あの子には弟妹が八人いるのです。学校の給食パンをこの上もないご馳走のように思っている弟や妹のため、給食パンに殆んど手をつけず持ち帰り、分けてやつとるとですよ。どんな辛いことも空腹も耐え忍んでいるのです。テーブルの上の料理あんなものは一度も食べたことはないと思いますよ。料理は全部持たせて帰しますが、それがいいことかどうか、私にはわかりません。料理代二千四百円、先生と折半しましょう。千二百円下さい」

顔をくしゃくしゃにして、流れる涙を拭きもせず小母ちゃんは一気にしゃべった。私は言葉もなく、ただうなずくだけだった。

出張からの帰り学校に寄ったら、事務室の私の机の上に新聞紙にくるんだ見事な山芋が二本置いてあった。

ピンときた私はレストランへ行き、小母ちゃんに手渡した。いろいろ言う必要もなかった。

二日後レストランに寄ったら

「先生、待ったです。主人もまだか、まだかと言っていましたよ。あの山芋旨かったですよ。いままで食べたどんな料理より旨かったです。山芋はあの子の家の大切な収入なのに……。あの子の気

持を思うと、たまらんごとになって泣きながらとろろ汁を食べていたら、主人があきれたような顔で

『お前泣くか、食べるか、どっちかにしたら』

と言うので

『そがん閑はなか』

と言い返したとです。すると主人が『あの子いい面構えしとるよなあ。いちいち言い訳を口にせんとこがいい。いい根性しとるよ。今度あの子と会った時、山芋の代金を差し出すようなことはすんなよなあ。旨かつたの一声でいいんだ。生活はきつても先生の机の上に黙って山芋を置いて去った、あの子の心意気を買ってやらんばね。

まだ少年だがちゃんと男を立ててやらんとね』

こう言うのですよ」

小母ちゃんは少し顔を赤らめて

「さんざん苦勞した若いころのこと思い出すのでしよう。♪包丁一本晒しに巻いて……。酔っぱらうと必ずこの歌を一つ、泣きそうな顔をして歌う、うちの父ちゃん、いいところあ……。」

後はしゃくりあげて、言葉にならなかった。

涙が頬を濡らしていた。

「いま主人が料理を持って来ますから、どうか召し上がって下さい」

間もなく主人が麦飯と、とろろ汁、それに自慢の漬物を運んで来た。

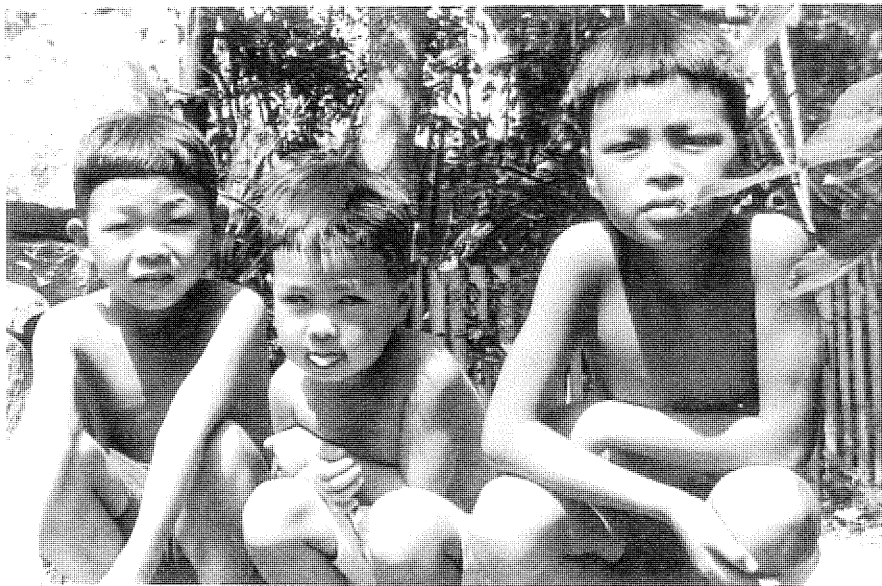
私は立ち上がって、深く頭を下げた。主人は

「母ちゃんがいろいろ失礼なことばかり言って、すみません」

といい、私が箸をつけるのを待っている様子だった。

貧しさと日々闘っている少年のことを思ったのか、主人の頬に涙がひと筋走った。

私は山芋を食べながら、こみあげてくる涙をどうしようもなく、目を閉じて声を出さずに泣いた。



噂のおにぎり

どんなに旨そうな高級料理よりも塩むすびに魅かれる私である。

テレビの時代劇で、竹の皮から取り出した白い握り飯を見ると、無性に食べたくなる。おにぎりの起源は弥生時代までさかのぼる。多くの人々にとって運動会や遠足、花見など家庭や地域の楽しい思い出と結びついて、懐かしい味の一つである。

それぞれの家によって具や形が微妙に違うおふくろの味である。

昨年度のおにぎりの売り上げは、全国で約八億個に伸びたそうである。一昨年大阪で見たおにぎりの販売店では、具の種類が百を超えていたのには驚いた。

私は時折福岡へ出かけるが、昼時になると、何か食べなきゃいけない、さて何にしたものかとあれこれ思い昼食メニューの選択に思い悩んでいた。うどん、ラーメン、チャーハン、カレーライス、寿司はやめて、もつばら塩むすびに決めてからすっきりしている。腰を下す場所さえあれば抵抗なく食べることがで

きる。

卒業式は学校の大きな行事の一つである。酒の飲めない私は式終了後の乾杯など、一応の義務？を果たし、やっと抜け出しバス停へ向かって歩き出した。ふり返ったら卒業生のD君がついてくるので「どうした」と声をかけたら「先生お願いがあるんです。私は長崎の方へ就職のため、明後日出発しますが、大変お世話になったレストランのお二人に、お礼が言いたいです。先生一緒に来て下さいませんか。お願いします。」

そう言つて頭を下げた。私も四月には故郷の島の学校へ行くことになるだろうからと思い同行した。

レストランに入ると主人が

「二人揃つてこりゃあ珍しい。今日は中学校の卒業式で何かとせわしかつたでしょう。本来ならD君に卒業おめでとうと言うところだが、高校へ行けなくて取り残されたような寂しさでおれているのではないかと思うと、そうも言えないなあ。酒の飲めない二人だから、送別の食事をやりましょう。母ちゃん、休業の札を頼むよ。それと料理ができるまで二人の守りを頼む」

そう言つて調理場の方へ行つた。小母ちゃんは少し緊張した顔色だったが、お茶を出した後、静かに話し出した。

「古い話です。風邪一つ引いたことのなかった私が熱を出し寝込んだのは三月でした。突然彼がやって来て部屋に入らず障子を少し開けて廊下から

『熱が高いと聞いて、じつとしておれんでやって来ました。あなたに万一のことでもあったら俺……生きていく気になれんのですよ。突然こんなことを言う私を許して下さい。あなたのいないこの世に生きていても、しょうがない。そう思うのです』

それだけ言ったかと思うと、さっと立ち上り去って行きました。後には竹の皮に包んだ三個のおにぎりがありました。親しい付き合いもなかった、日頃無口な彼から、こんな言葉を聞いて本当に驚きました。当時彼は十余人を束ねるホテルの料理長をしていました。

若くして起用された彼の苦労は並大抵ではなかったと思います。苦勞している若者を見ると親身になって世話をし、あいつ寒そうにしていたからと、買ったばかりの衣類をやったり、生活の底が抜けているので、みんなが付けた綽名はざるでした。

料理コンクールにおにぎりを出品し、多くの人を驚かしました。有名な審査員が一口食べ『うーん』とうなったそうです。特別賞に選ばれました。米・昆布・海苔など納得のいく材料が揃わないと握ることはないと聞きました。

朝から何も食べていなかった私は、おにぎりにかぶりつきました。そしてそのおいしさに驚きました。感動でのどに詰まりそうでした。あの頃の私はたしかに人間のぬくもりに飢えていたとは思いますが、何の取柄もないただ真面目に生きて来ただけの私のような女に……と思うと涙が止まりませんでした。

翌日病院の帰り、回り道をして彼の住まいの前を通りかかると彼が庭にいました。沈丁花の生垣の前で私は立ち止まり、自分から右手を差し伸べて彼に初めて握手を求めました。彼はその手をおし頂くように

両掌で握り、涙を流しました。

三十数名ぐらいのささやかな結婚式を計画しました。式の当日、意外な方面に走り出し戸惑いました。席が百を超えていました。

仲人の挨拶の後、主人の仲間だった人が話し始めました。

「本日はホテルの社長が祝辞の予定でございましたが、代わって私ごとき者が出て来たことに、皆さん驚かれたと思います。

四年半ほど前のことです。当時世の中の何もかもがいやになり、生きていくのが辛くなったことがありました。ホテルも止め、死に場所を求めてウロウロしていた時、本日の新郎の料理長がやって来てこう言いました。

『親より早くあの世へ行くのは、理由は何であれ人の道に反するぞ。両親をちゃんと見送ってから死ぬのなら俺は止めはしない。辛いだろうが辛抱せろよ。ここに七万弍阡円ある。今から両親の顔を見て来いよ』
こう言って金と一緒に竹の皮に包んだあの噂のおにぎりを差し出しました。その日に四国行の船に乗りました。波は高く船は揺れました。おにぎりを食べながら私は泣きました。噂以上の味でした。壹個食べれば個は両親への土産にしまいこみました。多分これが私の初めての親孝行だったと思います。

それから私は死にもの狂いで働きました。現在は八人の従業員のいる小さな工場をやっています。私の後ろにいるのは四ヶ月前に結婚した私の母ちゃんです。料理長の結婚を聞き、私の計画を相談しました。そしたら

『よし、やれ!』そう言って私の胸をドーンと突きました。

二人で今朝、女社長さんに会い、挨拶を一番先にと、お願いしました。もう一つはと言いかけたら『まだあるの』と不服そうでした。本日の結婚式の費用は全額二人で負担しますと言ったら、女社長は立ち上り、『なあば言いよつと、新郎はホテルの料理長、新婦は経理をやつていて、人情の里のホテルを企画し、多くの人に愛される宿にした功労者ですよ。あんた達二人にそんなことされたんじゃこつちの立場はなか!』

すごい見幕でした。しかしこれぐらいのことでしたじろぐ母ちゃんではないんです。一見優しそうに見えますが、空手三段の強者なんです。困難にぶち当たると『オリヤーツ』と怪鳥のような気合を発し勇気を奮い起こし、事に当ります。今朝もここにやつて来る途中、中年の女性のバックを引たくって逃げる若者を見ました。間髪も入れず母ちゃんの裂帛の気合が響きました。驚いた若者の足は止まり、バックを置いて逃げて行きました。母ちゃんは立ち上って

『あなた達と違って、地面を這いずり回るような生き方をして来たこの人の一生に一度あるか、ないかの願ひ事です。それを壊しちゃこの人が可哀想じゃなかですか。かつて、助けて頂いた料理長への、ささやかなお礼の気持をつみ取るようなことはやめて下さいよ』

二人の睨み合いは続きました。女社長の立場を考えたのか珍しくこの日は母ちゃんが一步引き、半額づつの負担で解決しました。

式の挨拶の練習を母ちゃんの指導で、毎夜遅くまでやりましたが何の役にも立ちませんでした。折角で

すので一言申します。

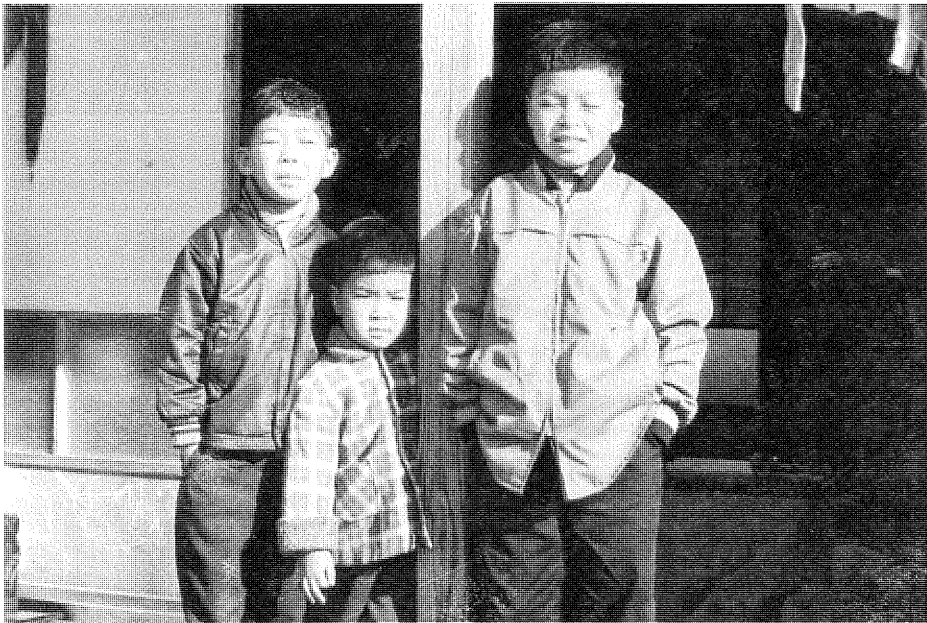
本日は誠にめでとうございます。お二人のお幸せを心からお祈り申し上げます」

こう言つて二人は深々と頭を下げました。女社長は立ち上り目を赤くして、いつまでも拍手を続けました」

「どうもお待たせしました。母ちゃんが古い話をするので照れ臭くて、出てこれませんでした」
そう言つて噂のおにぎり・味噌汁・漬け物を運んで来た。

「今日の食事がぬくもりのある思い出の一つになれば私は嬉しいですよ。さあ召し上がってください。
七年振りで握りました」

四人は無言でじつとおにぎりを見つめました。小母ちゃんは涙ぐんでいました。いままで食したことのない味に、私は驚きました。この日二人が示したこまやかな人情は、かけがえのない、いい思い出として私の胸に残りました。



波止場の母と娘（復員余話）

「文協いろは」にいろいろ書くのはもう卒業しようと思っていた。ところが会長さんはおだてるのが実にうまく、それで卒業できずにいる。

おまけに感想を述べたり、励ましてくれる人もいてまだ書き続けている現在である。

私の子供たちは私の書くものは注意深く読んでいるようである。感心して読んでいるのではなく、ボケが始まっていないかどうか検査をしているようである。それがわかつているだけにいい加減なことは書けず、苦勞している。

ところが年賀のやり取りをしている古い仲間に、経済界や音楽界で今なお見事に活躍し、新聞紙上などで大きく取り上げられているのを見ると刺激を受ける。

年に一度の短い書きものに、思い悩むことなどもつての外と思うようになった。

読んで下さる人さえいれば、編集者の求めさえあれば、次回からはもつといいものを書いて、批評を受けたいと思っている。

子供たちが住んでいる福岡へ私はよく出かける。最近は伊万里から高速バスを利用しているが、その前は波多津から唐津行のバスを利用していた。客は以外と少なかった。

ある日のことである。少ない乗客の中の一人の女性が私を見て静かに頭を下げた。

私が忘れるのは仲間うちではかなり有名だが、その日もそうだった。どうしても思い出せない。あきらめて考えないことにした。

途中、バスから降りるその人が又頭を下げた。私は知っていたふりをして挨拶を返したが全くわからなかった。

子供の案内で博多港の施設を見て廻った。意外と規模が大きく驚いた。

島育ちの私は海との縁は深い。戦中、生死の境をウロウロしたのも海だった。

岩壁からじつと海を見ていて私は思わず「あーっ」と声を上げた。バスの中の女性を思い出したのである。物静かな伏目の表情、確かにあの時の表情を残していた。

終戦から一年を経過した八月のことである。応召してから五年余りになる親類筋のBが、突如わが家にやって来た。

頭には軍隊の略帽、足には長靴、服は将校用の軍服をまとい、ちよつとおどおどした落ち着きのない態度で

「ゆきちさんね。おじさんはおらすね」と言う。急いで父を呼ぶと

「おーっ、よう生きとつたね。よかった、よかった。お母さんが元気なうちに復員できてほんとよかった。お母さんが喜んだろ。さあ上がってお茶でも飲まんね」

「まだ家には帰つとらんです。おじさんに一緒に来てもらいたくて、ここに先に来たんです」

その声にすがりつくような響きがあるのに気づき、私は何とも言えない不安に胸をしめつけられるのを感じた。

「どうして、早く帰ってお母さんば安心させんばたい」

と言ったものの彼の後ろにいる一人の若い女性を見たとき父は驚きあわてて黙り込んでしまった。事情を察知した父は、助けを願う彼の顔色を見て、私に船の用意をするように言った。

当時は珍しかった、チャッカー船がわが家にはあった。船の用意をしている私のそばに母が来て、

「復員できたのはいいが、許婚のF子さんが待つとらすとばい、あの家が今日まで立派にやってこられたのはF子さんの力ばい、あの広い田んぼや畑を苦勞して守ってきたF子さんをどがんするつもりじゃろうか、あの優しかF子さんが可哀想かあ」

そう言つて涙ぐんだ。

Bの家のある集落の小さな波止場に着くと、父は私にBの復員したことを先に行つて知らせるように言つた。ちよつと気は進まなかったが私は坂道を一気に走つた。

Bが家に着いた時には、すでに多勢の人が集まつて喜び合つていた。F子さんの嬉しそうな顔を見て私は気が重くなつた。Bと連れ立って入つて来た女性の姿を見て、多くの人たちは急に静かになり、異様な

沈黙が続いた。

F子さんは台所の方へ行つたままいつまでも、もどつて来なかった。のぞいて見るとそこにうずくまっている彼女の背が見えた。その背が小さく震えている。彼女は顔を手で覆つてすすり泣いていた。

とり返しのつかない回り道をしたことが、わかつたのだろう。この家は自分の来る家ではなかつたのだと、はつきりわかつたのだろう。立ち上がった彼女の眼からほとばしるように涙があふれ落ちていた。

二度と来ることはないBの家をしばらく眺めた後、彼女はゆっくりと歩き出した。寂しげな微笑を浮かべ足音を立てずに離れて行つた。

それまでじつと、うつむいていたF子さんの母親が、顔を上げてBを見た。そして立ち上がつてキツとBを見た。ひと声も発しないが、その眼から抗議ともとれる涙を見せていた。F子さんの後を追う母親の姿が哀れに見えて胸がつまつた。地上に影を曳いて母親はゆっくりと遠ざかつて行つた。

明るいうちに、そう思つて帰ることにした。

私ら父子を見送るB一家に、私は振り返らずに小石を蹴つて歩いた。

途中、道わきの大きな榎の木の下に、数人の女性が集まつて立ち話をしていた。

「戦争に負けた兵隊さんが、毛布や衣類などお土産に持つて帰るなんておかしかあ。その上女の人まで連れて復員する人もおらずとばい。ほんなこてあきれてものも言えん。日本のオトコはどうかしとる。全くアテにならん。これから先の日本は女がしつかりせんと、どうにもならんんじゃないかろうか。

わが家の門をくぐる前に、近くの先祖の墓に復員の報告をするごたる気持のなかけん、間違いを起こすと

たい」

わたしら父子はこの人たちの前を頭を下げて通り過ぎた。

復員して間もなかった私はいろいろと考えさせられた。それから五カ月後、父は六十七歳であの世へ旅立った。一緒に船で出かけたのはこの時が最後だったから、忘れることはない。

それから私ら父子は、夜はホテルの舞う川沿いの道を波止場へとゆつくり歩いた。黙り込んだままとぼとぼと歩いた。日はすでに西に傾いて力を失っていた。

波止場にはF子さん母娘が立って海をじっと見ていた。話しかける母親に

「お母さん、お願いだから過ぎたことはいろいろとあんまり言わないでよ。辛くなるばっかだからさ、哀しくなるばかりだから」

いくらか咎めるような口調で言った。その眼からは新たな涙が落ちていた。うつむいて唇を噛んでいた。

「F子さん。生きていれば、生きてさえいれば、必ずいいこともありますよ。辛いでしょうがどうか元氣を出して下さい」

父は平凡なことを言った。彼女は素直にうなずいてこう言った。

「いまはそつと母と二人で静かに過ごすのが、私にとって心の傷手の癒し方ではないか、そう思います」その痛々しいものに私は胸をつかれた。

時がたてば人の気持というものは、変わるといふことを思い知らされた母娘である。

小さな波止場に潮は満ちていた。もう二度と会うことはないであろうこの母娘の、これからの生き方を

思うと胸がつまった。

世の中には家族に恵まれず、ひとり侘びしく暮れ正月を迎える人も少なくない、こんな話をしたかったが、声にならなかった。

太陽の傾きをしらせるかのように、ヒグラシが鳴いた。

途中、エンジンの故障で遅くなり、島に着いたのは夜だった。母が海辺で待っていた。

星が一つ流れた。星空をあまり眺めることなどなかった私だったが、この夜はじつと空を仰いだ。星がおどろくほどはつきりと、空の隅々まできらめいていた。



赤い夕日

一月十五日、十六日に入試センター試験があった。

私は受験生になったつもりで取り組んでみたが、全く駄目だった。国語ぐらいはと思い、やってみたが、さっぱりだった。受験生がひどく偉く思えた。

写真、パソコン、もの書き、みんな子供や孫に抜かれ、ただ抜かれないのは年齢だけとなった。パソコンは三台壊し自信を失くしている。

私は現在本を買うことは殆どない。本好きの子供たちが読んだ後、次々と私の家へ運ぶのである。なかには貴重なものもあり、捨てられない。生きているうちに整理しなければと思い続けている。

終戦後のニコンの第一号の写真機だけを残し、三台のニコンの写真機、レンズ、三脚などは孫が持っていく、活用している。海外での多くの写真の中にはハツとするようなものもあり、驚いている。私らの若いころと違い、指導者がいいのではないかと思ったりしている。

一昨年暮れの入院中、同室の人といろんな話をした。こんな愉快な日を過ごしたのは初めてと言う人も

いた。

鍋島という姓の人がいたので、私は眞面目な顔をして、佐賀鍋島藩主のご一族の方ではないですか、と言ったら慌てて首を横に振った。鍋島藩の化猫騒動を思い浮かべ

「罪滅ぼしのため、猫を飼ってるでしょう」

と駄洒落を言ったら

「はい、六匹飼っています」

との返事に私は驚いた。

六匹の猫のため如何に家の中が大変であるか、ると話をされた。猫の習性についてじつくりと説明も聞いた。

そんな話をしていたら隣のベッドの人が、小さな声で

「私は三十六匹飼っています」

それを耳にした途端、二人共あきれて黙り込んでしまった。猫の部屋の増築、食事、獣医さんとの連絡、その他いろいろと苦労話をされた。

旅をして記憶に残るのは名所・旧蹟などではなく、その土地の人びとと接したときの人間的交流である。東南アジアを旅したときのことである。フィリピンの田舎の人通りの少ない道ばたで、空箱の上にマンガ、バナナを並べて、辛抱つよく客の来るのを待っている少女たちを見た。マンガの好きな私は二個注文した。驚くほど安い値段であった。なんだかいじらしくなり倍の四十円を差し出すと、首を横に振り二十

円を返した。なんだか悲しくなった思い出である。

子供が親の手伝いをする、そういう風景は現在の日本ではあまり見られない。

子守り、雑巾がけ、庭掃除、水汲み、風呂焚き、かつての子供たちは家事の手助けをさせられた。赤ん坊をおんぶして学校へやって来る女の子もいた。

いまにして思えばそうやって子供たちは、何事かを覚えさせられていたのだと思う。かけがえのない教育の一面ではなかったのだろうか。

○中国人墓地（マニラ）

日本の墓地を想像して行くと、それこそ度肝をぬかれる。ここ中国人は自分たちの墓を作るのに、莫大な費用をかけ、金を惜しまない。どの墓もコンクリートの家のように、塀あり、門あり、内部の飾りも豪華そのものである。

エアコン付きの墓などもあり、その見事さに驚かされる。ここ中国人の商才は見事なものであり、十代の少年が、リーダーとなって活動している店は多い。

○米軍戦争記念碑と墓地

第二次大戦で戦死した、アメリカ軍一七、一七七名の英霊がねむる地、中央の記念堂に激しかった戦闘の様相を語る“戦略図”が描かれている。マカティ地区の近くにある。

一人ひとりの立派な十字架の墓が広大な地にある。

この地で戦死した多くの日本軍将兵のことを思うと、たまらない気になる。このことについていまの私は書く気力がない。ただ涙するばかりである。

○マニラ湾の夕焼け

ロハス大通りから眺めるマニラ湾の夕焼けの息を呑むほどのすばらしさは、世界的に有名である。戦時中私はマニラ湾の夕日を幾度も見た。その度に故郷の島の夕日を思い浮かべたものである。

日本の米を十日も食わずにいたら、我慢できなくなり、香港のデパートで日本人の婦人を見つけ、米を食べさせてくれる店を聞いたら案内してくれた。米、味噌汁、漬物が出た。その旨かったことは今でも覚えていいる。

宿は六十四階だったと思う。エレベーターの早さに驚き、用もないのに上り下りをやったら、ボーイが来て笑って手を出しチップを要求した。百円やったらもっと乗れと言った。

台湾では日本語が少し通じるので助かったが、外では不自由した。ゼスチャアは大分うまくなった。その時のことを話すとみんな笑うに違いないので、言わないことにしている。

年を重ねるにつれて、知人・友人らの訃報に接することが多くなった。特に昨年は生死を共にした戦友会のメンバーが次々とこの世を去ってゆき、しめつけられるような寂りような感が私を包んだ。

人生、長生きすればいいというものでもなく、若くとも燃焼しきって完結した人生もある。歴史上偉大な事績を残した人物で意外に若い年齢で死んでいるのに驚くことがある。

人間五十年、下天の内をくらぶれば
夢まぼろしの如くなり

と、うたった信長が本能寺で殺されたのは、四十九歳であつた。作家にも立派な仕事をなし若くして死んだ人もかなりいる。

私は現在島の一隅に住み、他の人と仕事上のきびしい上下関係などない。

かつての軍隊は階級制度のかたまりで、野性的な上官、神経質な上官、頼りない上官、そのタイプはさまざまである。自分の意志を主張できない兵隊にとって、尊敬に値せぬ上官に遭遇したときほど、みじめなものはない。

昭和十九年九月十五日早暁、基隆港を出港直前、米軍機動隊の襲撃を受けた。瞬時に十八名の戦死者が出た。

十二月七日再度基隆を訪れたとき、山の中腹に供養塔を建てて、あの日の犠牲者の冥福を祈った。その折お経を上げたのがBである。

切れ目なく降り続ける細かい雨が心にしみた。

彼は僧侶ではなかったが、お経ができた。ところがお経を始めた途端、M少尉が

「おい、お経は初めと終りだけやれ、真ん中は抜いてやれ、いいか」

と怒鳴った。戸惑ったのはBである。何とも変なお経になってすぐ終わった。

戦友会の度にこのことが気になって仕方がない。生きているうちに基隆に行き、ちゃんとしたお経を上げたいと言いつづけた。

言われてみればうなずくことばかりであった。その話の中には鋭く胸を打ってくれるものがあつた。その彼が基隆を訪れることができたのは、五十一年の歳月が流れてからであつた。

現地は供養塔は引き抜かれ、跡形もなく無残なものとなつていた。わずかに数箇の石が昔日の面影を残していた。

「遅くなつてご免なさい」

そう言つた途端、涙がとめどなく溢れ、立っていらなくなり赤土の上に座り込んでしまつた。

なつかしい故郷の山や河を見ることもなく、最愛の父や母に顔を見せることもなく、あえなくこの地で散つた二十代の若者たち。

彼は誰にも邪魔されることなく、泣きながらお経を読んだ。二度と来ることはないであろうこの地。

長い間の願いを果たした彼は、赤い夕日に照らされた山の斜面を、ゆつくりと、ゆつくりと歩いて降りた。



最後の歌

平成二年七月七日、かつての中隊の生き残り十七名が、二日市温泉の宿に集まった。
会えば黙って手を握り、肩を抱き合い、涙ぐむ者が多かった。

あの戦争の時代は遠くなっても、決して遠のくことのないさまざまな記憶が自分たちにはある。
同年兵のFが出席してないのが気になった。彼は私にこんなことを言ったことがある。

「木寺、お前はちよつと見たところ馬鹿には見えんが、あんまり頭は良くねえな。お前のごとオツトリ
していたら生きて故郷の山や海を見ることはできんぞ。

お前台湾から氷砂糖など内地へ送ったそうだが、そんなもんが無事に着くと思つとるんか。戦争で人の
心は荒れている。みんな途中で横取りされるんじやよ。

戦争は勝つか、負けるか、わからんがいつか終る。その時生きて帰るか、骨で帰るか、その差は大きい
ぞ」

十八年九月二日比島セブ島に上陸、ガダルカナル方面で壊滅した船舶部隊の再建をしていた船舶兵団の

指揮下に入った。

リロアンという寒村があるが、ここに晝部隊三千五百名ぐらいの新兵が訓練を受けていた。治安が悪く外出はできなかった。夜中に兵が随分と殺された。

オーロラと名づけた原地の少年を私は可愛がった。

タオル、ハンカチ、赤チンなどをやると、旨いマンゴ、パイヤなどを持って来た。

ある日、トラックに乗った兵たちがやって来て、マンゴを取りに行かないかと誘った。マンゴ街道と呼ばれる場所へ行くのである。私が行く準備をしていたらオーロラがやって来て、

「マンゴを持って来た」

と言い私の手を引っ張り、行かせなかった。

トラックは土ぼこりをたてて出発した。そして、そのトラックは、帰ってくることはなかった。そして又、それっきりその日を最後にオーロラ少年は姿を見せることはなかった。

戦況は昭和十九年九月二十一日を境に極度に悪化した。その日の朝八時、澄み渡った青空に、米軍機の大編隊が現れ、マニラ湾に浮かぶ日本船団は破壊された。翌二十二日も続いた。日本軍の戦闘能力は半減した。

このような状況の中で、平常心を保つのはむづかしい。

日本を離れて外地にゆくと、再び帰れるかどうかという気があるから、みんな何となくしんみりしていて、物静かな感じであった。戦況が悪くなると考えることが多くなる。

昭和十九年四月九日、高雄に上陸したら、初年兵が待っていた。

昭和二十年二月台北市に至り植物園の宿舎に入った。

この間が私の一番いい生活だった。船舶司令部に勤務したが、学生出身者が多くどこことなくゆったりしていた。

戦後に訪ねて見たが、原地の人々は温かく迎えてくれた。

植物は手入れがよく、昔よりきれいになっていた。

食いしんぼうの私だが、台湾料理は油が多いのが苦手である。

台湾で一番旨いものは、花連港の「カツオの塩辛」である。長い間その味を求めてあちこち探したが無い。どなたか台湾に行く機会があれば、是非手に入れて下さい。

旨い理由はわからないが、岩塩にあるのではないかと思ったりしている。

宿の女将がやって来て、

「聞いて貰いたいことがありますので、しばらく時間を下さいませんか」。

そうやって六十歳代と思われる婦人を紹介した。

「私は終戦後、食糧事情などの関係で東京から、母の故郷である柳川市近郊に移り住んだ、坂田と申す者でございます。

父を早く亡くし、兄と私は母に育てられました。

女手一つで手間賃などに励む母の苦勞は、子供の目にも痛々しいほどでした。母の寝ている姿は殆ど見たことはありません。苦しい生活の中から、兄を大学、私を女学校へ進学させてくれました。

ある日、兄がこんな話しをしました。

『今日は素晴らしいハーモニカの演奏を聴いた。曲は「海ゆかば」を編曲したものだったが感動で涙が出た。できたらもう一度聴きたいもんだ。音楽家志望の九州出身の人らしかった。こんな時世だからもう聴けないだろうな』

太平洋戦争の後半、日本軍が敗退し、玉砕を重ねたとき、それを報じるラジオから流しつづけられた「海ゆかば」勇壮にも響くが悲哀を感じさせる曲でした。

多くの人の記憶に焼きついてるのは、昭和十八年東京の神宮外苑競技場で催された、出陣学徒壮行会の光景ではなかったでしょうか。

母と私は懸命に兄の姿を探しました。雨の中、泥だらけで行進する学生たち、母は見逃しませんでした。突然、前方を指差し、

『居たっ！』

と叫びました。

もう再び生きて会うことはないと思ったのでしよう。

大きく腕を振り、足を上げ、その場で行進をはじめました。

雨に打たれながら、涙をボロボロ流しながら、顔をグシャグシャにして、学生たちの歩調に合わせまし

た。

私は母を見守りながら、その愛情の深さに泣きました。学生たちを見送る大観衆が「海ゆかば」を歌いはじめました。

地響きのような歌声でした。

あれから四十七年の歳月が流れました。先年母もこの世を去り、一人ぼっちになりました。その私に体が震えるほどの嬉しいことがありました。兄が話していたハーモニカ奏者の方がわかったのです。

ここにお集まりの中の音楽家、伊藤先生でした。兄の写真と一緒にやってきました。

先生、勝手なお願ひでございますがどうか、どうか・・・」

後は言葉にならなかった。

話しを聞き終った全員十七名は、俯いたまま全く身動きしなかった。たまりかねた誰かが

「しつかりせい、伊藤」

と気合を入れた。

「そうだ、お前の分野だ。指図をせい、指図を」

ようやく立ち上がった彼は、

「場所はピアノのある大広間、会場づくり、マイクの取付け、楽譜のコピーを頼む」

と言つて、駆け足でどこかへ行つた。

三十分ぐらいして同じ宿にいたらしい、ソプラノ歌手のC女史と伴奏者を伴つて帰つて来た。三人で細かい打合せが進んでいる様子だった。

「みんなよく聞いてくれ。先に俺のハーモニカの演奏、つづいてC女史の独唱、最後は全員で「海ゆかば」を合唱する。いまからやることは、単なる音楽会ではない。心を込めて歌ってもらふ。いいか」

「返事が小さい、返事が」

「ハイッ」

と叫ぶような返事をしたのは、いつの間に集まつたのか、泊り客と従業員の百名近い人々でした。

彼は写真に向かつて深く深く頭を下げた。振り向いた彼の顔に涙らしいものが見えた。

会場は緊張感が漲つた。

少年時代ハーモニカ小僧と呼ばれ、多くの人に愛された彼、三本のハーモニカを使つての独奏は、会場の人々の胸を打った。

ソプラノ歌手のC女史の音量は会場を圧倒した。拳を握り少し涙を見せながらの「海ゆかば」の熱唱だった。伊藤は大きくうなずき満足気だった。彼のタクトの合図で、全員の合唱になった。終ると伊藤は写真に頭を下げた。そして依頼者の婦人の側に行きその肩を抱いた。婦人は手を合わせた。

今後、口ずさむこともないであろう最後の歌「海ゆかば」であった。



永遠の別れ

私たちはさまざまな別れを経験している。何でもない別れと思っていたものが、そのまま永遠の別れとなってしまった場合もある。「別れ」のその別れ方を思い浮かべると、別れはやはり悲しいものである。日中戦争が始まったのは昭和十二年七月・遠い日、拒むことのできない赤紙一枚で、愛する家族と別れた光景をじつと見てきた人々も今は少なくなってきた。

過ぎし歲月の中、父母はあの世へ旅立ち、とても生きては帰れないとあきらめていた私は生きている。羽田から福岡へ向かう飛行機の中で隣の席の中年の男性がすこし疲れたような口調で、次のような話をした。

「私は今日、泉岳寺に行つて来たのですが、やり切れない気持ちになり、堪え難い寂しさを感じました。一人の老人の首と引き換えに、浪士全員の切腹、見方によつては斬首ですよね。親、妻子、兄弟、姉妹、恋人、友人らは死に赴く彼等をどのような思いで送ったのでしょうか。」

どんな理由があつてのことか、わからないがああ粗末で、小さな墓はなんですか。あれでは浪士全員が

哀れですよ。

せめて、せめて死後ぐらいは大切に扱ってやらないと……」
そう言つて、うつすらと涙を浮かべた。

泉岳寺・曹洞宗

東京都港区にある。万松山と号し、一六二二年（慶長一七年）徳川家康が宗関和尚に命じて外桜田に創建させたのを、寛永一六年現在地に移転したといわれている。

播州（兵庫）赤穂城主浅野家の菩提寺で、浅野長矩夫妻・赤穂四十七士・天野屋利兵衛・村上喜剣らの墓がある。

元禄十四年三月十四日、殿中「松の廊下」で後の「忠臣蔵」へと発展する刃傷事件は起こった。

巳の上刻（午前十時）から六つ刻（午後六時）過ぎにかけて、刃傷……田村邸お預け……評定……切腹……と、その日のうちに矢継ぎ早に執り行われた。

「切腹」……殿中での刃傷とあれば已むを得ぬ裁きとはいえ、問題なのは、浅野内匠頭がいかにかに青年の激情家にあつたにしろ、多くの家臣、家族を抱える大名であつたのだから、今少し慎重な調査をすべきではなかったろうか。喧嘩両成敗の原則を踏みにじった、公平を欠く短絡的な裁きが、浪士たちの仇討ちへと発展したのである。

昨年、一昨年と私の話し相手が相次いであの世へ旅立って逝った。鋭い悲しみが私の胸を突き刺した。故郷福島海や山、出身高校のある平戸のことなどを語る時には静かな熱を帯び、詩情が漂ったものである。

彼がわが家にやって来る時には、私は必ず京都の酒を用意した。私が大きな手術を受けた時、遠方からやって来た彼の顔色は青かった。今生の別れになるのではという不安からか落ち着きがなかった。二人でよく映画を見たものである。

米国西部のワイオミング州、ロッキー山脈のふもとに広がるグランドティトン国立公園・その一角に、開拓時代の丸太小屋が荒れ果てたまま、ポツンと今でも取り残されている。

映画「シェーン」のファンが大勢やって来ては、シャツターを切っている。

映画が公開されたのは1953年（昭和二十八年）。

冒頭と最後のシーンが私の胸を強く打った。

一度は捨てた銃を手に、シェーンは闘いの場に向く。

「銃は捨てたんでしょう」

とマリアンが言った。

「気が変わった。あんたや家族を守るために」

そう言って、手を握った。最初で最後の触れあいだった。

銃撃戦の後、静かに去って行く男の後ろ姿。この別れ方が世界中にファンを広げた。私はこの映画の中

の背景にそびえるロッキーの山並がたまらなく好きになり、彼と一緒に写真を撮りに行こうと話合った。それもはかない夢となった。

体調が悪く彼の墓参りに行けないのが残念でならない。

父が亡くなったのは昭和二十二年一月六日、こんこんと眠り続ける父だった。医師の指示だったと思うが足許に湯タンポを入れたのはいいが、足が低温火傷をおこしていた。私は、

「ご免なさい、ご免なさい」

と小声でつぶやき足をさすりながら泣いた。

人生最後の場でこのような不始末をした自分が悲しかった。悔の残る悲しい父との別れであつた。

いま私の手許に古い懐中時計がある。父が何十年も愛用したものである。父は考えをまとめる時、必ず時計を取り出し見るくせがあつた。

終戦後の食糧難時代、買い出しは殆ど母がやっていた。その日は、珍しく父が私を連れて、島外の農家を廻ったが母のようにはいかなかった。父はあきらめたのか時計を取り出しじっと見つめ立ち去りかけた時、倉庫の方から来た老人が、

「お金はいらん、これを持っていかんですか」

そう言つて米袋を板の間にドサツと置いた。父は驚いた様子だったが、時計を取り出し老人の前にそつと差し出した。

老人はあわてて

「そがんことせんでよかとですよ。私は病気でそう長生きでけんのです。生きとるうちにちよつとだけ人助けをしたかとです。遠慮せんで持つて行かんですか」

そう言つて時計を押し返した。父の眼はうるんでいた。

二人で分けて背中に負い、わが家へ向かつたが足は疲れ、米は重かつた。だが気分は軽かつた。わが家へ着くと母は驚き声も出なかつた。

戦友会のメンバーも殆どがこの世を去り、わずか残っている者も老いて集まることができなくなつた。最後の戦友会の時、一人がこんな話をした。

若くして戦死した者は可哀想だというが、それより輸送船に乗り、祖国日本に最後の別れを告げた後、敵と一戦も交えることなくバシー海峡の藻屑と消えた者の無念さは、計りしれないものがあるのではないかと言つた。

旨い鉄砲漬や絶品の菓子を定期的に届けてくれた彼がいなくなり、寂しくなつた。

私のよき遊び相手だつた平戸の友人は、尺八を演奏しながら大勢の人の前でコトリと逝つた。多くの逸話を残してさつさと去つて行つた。

「おーい、生きとるやー」

とよく電話をした彼も、さすがにあの世からはかけてこない。

私も、さして遠くない時に死ぬことは確実である。しかし、兄は九十五歳、姉は九十二歳になつても元気である。順序があるので私は簡単にあの世に行けないでいるが、さてどうなることやら。



追想

合併は悲しからずや

人は右 魚は左で

浜は声なし

離島に住む知人の昨年の賀状の文句である。これを最後にバツタリと消息が途絶えた。

かつて故郷の島に帰る度に、必ず極上のうにを持って来てくれたものである。老いた母上が息子が世話になるからと、心を込めてこしらえたものであった。そのうにも、もう口にすることはない。寂しい思いがしてならない。

又職場を共にした仲間の一人から、

「米寿を迎えましたので、今年で年賀の便りを終らせていただきます。肩を痛めだんだん字が書けなくなってきました。長い間いろいろとお世話になりました。」とあった。

寂しい賀状であつた。

賀状も電話もない音信不通だつた、かつての同僚がある日忽然とやって来て私を驚かせた。寂しげな笑みを浮かべ、コクリと頭を下げた。病だとすぐわかつた。

かつて原因がよくわからない病気で苦しんでいた彼を、福岡の大学病院へ連れて行つたことがある。散々の検査を受け出来た調査書を見ながら、偉い先生はこう言つた。

「空気の飲みすぎですね」

私は驚いて聞き返した。

「空気の飲みすぎ」

とハッキリ言われた。空気を飲まなかつたらどうなるか、深呼吸はしていいのか、私の頭は混乱した。薬をもらい病院を出たのは夕方だつた。

市内でちよつといい宿をとり酒好きの彼のため、いい酒と旨い肴を注文した。彼は忽ち元気になり、検査結果に二人で大笑いした。

それ以来彼は立ち直り、健康を回復した。温厚な彼の元気な姿を見て、みんな心から喜んだものだつた。その日、教え子たちの車での送り迎えが嬉しかった様子だつた。

「それでは」

とつぶやきながら彼は深い溜息をついた。悄然と帰って行く彼の後姿に、最後の別れを感じ、私はこみ上げてくるものをどうしようもなかった。

赤穂浪士の討ち入りから三百六年になる。今は亡き上の兄は十二月十四日（討ち入りの日）生れであった。そのためだったのか、忠臣蔵に強い関心を持っていたようである。世評とは全く異なる見方をしていた。独特の鋭い感覚で全体像を見ていた。

泉岳寺に行った時、浪士たちの墓の粗末なものと小さいのに涙したものだが、いろいろ調べていくと、止むを得ないものであることがわかってきた。

釈迦は

「一切の衆生悉く仏性あり」

と命の平等を説いた。

だが戒名（法名）にはランクがある。

江戸時代の戒名（法名）は院殿大居士（大名用）―院居士（上級武士用）―信士（下級武士・農民・町民用）と身分に対応していた。

しかし武士は必ず居士号だったわけではなく、泉岳寺の赤穂浪士の墓も、家老の大石内蔵助だけが院居士で大きく、ほかの義士たちは信士で墓も小さい。

墓石も「高さ四尺（約一二〇センチ）までとされていた。

水戸藩では武士の墓石も二尺五寸五分（約七七センチ）以下に規制されていた。

今ではお金さえ払えば、誰でも殿様用の戒名がもらえるとと言う人もいる。

私の父は院号はいらないと遺言めいたことを言っていた。子供たちの出費を心配したのだろう。母は百

一歳まで生き、院号がついている。バランスが悪くあの世で父は苦笑いしているに違いない。

死んでしまえば、みんな同じだと思ふのだが、どうだろうか。

柳川の旨いうなぎが食べたくなった。柳川で一番旨い老舗の店は、持ち帰りは絶対できないので「俺は助かる」と生き残っている戦友は言っていた。

柳川に来たらうなぎ代だけは俺が全部負担するので、いつでもやって来いと言っていた。私も二度世話になった。最近は仲間も老いて体が不自由だったり、この世を去ったりで誰も来なくなった。経済的には助かるがたまらなく寂しいと言っていた。「死んだらうなぎは食べられんぞ」と俺は言い続けてきたのだが……。

福島で戦友会をやった時、日の浦にコーヒー店があるのに驚いた様子だった。

「新築の川上コーヒー店の屋根赤く、けさ降る小雪に濡れてゆくなり」。メモにこんな短歌を残していた。恥ずかしいので妻には内緒で少数の短歌をメモしている。

店がだんだんと無くなっていくのは寂しいものである。

生活面でいろいろきびしくなる世の中、せめて人情面だけは……という思いが強く湧いてくる。

酒が全く飲めない私は宴会は苦手である。盃のやり取りほど辛いものはない。ある大きな結婚式に出席した時、いつものように旨いものを選び、一皿持ってこっそりと隅の方へ行き食べていた。ところが旨いものの皿を持って私の横に来た人（A）がいた。すると今度は滅多に口にする事のない高価な料理を盛った皿を持って、又一人（B）がやって来た。

飲めない男が三人顔を見合せて笑った。

私の父は酒は一滴も飲めなかった。

正座しかしなかった。あぐらができなかった。歌えなかった。（音痴）踊りは駄目。手拍子も駄目。そんな父が秘かにマジック（手品）の研究をやっていた。人前でやることはなかったが、相当研修をやっていたようである。どういうつもりだったか、私にだけやって見せた。凄いと思った。

父親ゆずりの秘技をこの日初めてやった。驚いたのはマジックの名手として有名なAだった。

この日を起点として三人の交友が始まった。

年に一度Bの経営するホテルの最高の部屋で雑談した。破天荒な生涯を送ったB、雑談の名人A、この二人のことは、私の脳裏から消え去ることはない。

Aがこんな話をしたことがある。

自分の葬式に当って、楽しみにしていることがある。最後のお別れに来て下さった人にお別れの言葉をテープに吹き込んでいる。それをお聞きになった皆さんが、どんな反響をされるか、楽しみにしている。永い間お世話になった人たちに心からお礼の言葉を申し上げたい、と話した。

そのA氏も今はあの世である。家族は悲しくて、あのテープは使用できなかったと私は思っている。

再生工場と綽名された戦友がいた。一人は医師、一人は音楽をやっていた。

戦後間もない頃、汚れた衣服を着てやって来た患者は彼から叱られた。診察の前に風呂に入れ幾らかの金を渡した。病が重い患者が来ると、付き添って来た者は叱られた。

「こんなになるまで、ほつといて、もつと人の命を大切にせい。いいか、本人も悪いがなあー」
女性がオシヤレをせずにやって来ると、

「そんな格好をしていると、男は逃げるぞ。俺もあんまり診とうなか」そう言つて笑った。彼に経済的援助を受けた者は多数居た。

田川に住んで音楽をやっていた彼の許に、ある有名な女性の民謡歌手が、落ち目になり頼つて来た。基礎の歌唱力がない。声の良さだけで一時的に売れただけ、と言い厳しい指導を始めた。それが幾月も続いた。

彼が指揮するオーケストラをバックに、血を吐くような特訓による彼女の復活の唄声は、多くの人々の感動を呼んだ。

なぜか、最近、夢に亡き人たちが、よくあらわれる。



寒椿

衰えていく体力に老年の衰れを感じ、時の流れをしみじみ想うこの頃である。

過ぎし歲月の中、二人の兄はあの世へ旅立ち、戦地より生きては帰れないと諦めていた私は八十八歳となり、子供たちから祝福を受けた。

写真・玉突き・囲碁・その他いろいろとやって来たが、プロに近い技は何一つない。強いて言えばカメラ焼ぐらいだろう。

小学校の低学年の頃、父に連れられ博多の街で、有料でカメラ焼の特訓を受けた。はつきりとは覚えてないが、二日間ほどかかったと思う。

当時私の家はなんでも屋みたいな、小さな店をやっていた。

砂糖一斤で何個焼けるか、生活がかかっているので失敗は許されなかった。真剣勝負である。貧しかった

たから子供心にもその自覚はあった。私の焼いたものは評判が良くすぐ売り切れた。母の実家に行くときよくカルメラ焼をさせられた。私の焼くのを見て大人たちがやり出したが全く駄目だった。

「そんな遊び半分で作っては駄目」

と私が言うと、大人たちは驚いたような顔をした。

そんなことがあつて大人たちは焼くのを止め食べるだけになった。

世間知らずのポーツとした私をいろいろと助けてくれた戦友、大部分は他界したが、生存している一人から電話があつた。

「生きとつたやー。よかったー。寂しくなつたなー。俺も歩けんことなつたばい。台湾で食べたあんたのカルメラを思い出して電話したとたい」

復員の時、門司港駅まで見送りに来て涙ぐんだ彼だった。

同駅は、国の重要文化財に指定された唯一の駅。

遠い日、拒むことのできない赤紙一枚で、愛する家族と引き裂かれた光景を、じつと見て来た語り部の駅でもある。

上の兄は他界する前、私を誘つて母の里（波多津村大字筒井）を訪れて、寒椿の咲く墓の前で、長く頭を下げていた。幼い頃から母に連れられ幾度も来たいろんな思い出のある地である。

これが兄と私の最後の小さな別れの旅であった。

次の兄は昨年八月二十二日九十七歳であの世へ旅立ったが七月十一日わが家へやって来た。

「またね」

つかの間見詰め合い笑顔で別れたが、目にする後ろ姿はいつもとは違い弱々しく寂しかった。弱りつつあった体で最後の別れにやって来た兄の心情を思うと、こらえようもなく私は声を出さずに泣いた。

この兄も寒椿の咲くあの地を五月十一日訪れて

◎ひっそりと目立たぬ里の寒椿

辞世の句と思われるものを私宛に残している。

兄の生き方を示したと思われるこの句は鋭く私の胸を刺した。

男兄弟三人で旅をしたことがある。

「スッポン料理が食べたい」

と言う私の提案で佐賀の宿に向かった。

珍しいとは思ったが味は期待ほどではなかった。

農家の小母さんが打ったという蕎麦が出てきたが、これには三人共驚いた。

米が足りなくなってくると、母がよく打って食べさせて呉れた蕎麦の味に似ていたのである。手を合わ

せて頂いた。

貧乏に強い母だった。周りも皆貧しくて、そのような事は当り前のような時代、何の不満もなかった。百歳近くまで貝を掘り元気だった。

大晦日になると楽しみにしていることがある。それは、はりま釜の人が蕎麦を打ってくれるからである。わが家全員蕎麦好きである。特に食いしん坊の私は旨い蕎麦を求めて、あちこち行ったものである。池波正太郎の文に出てくる浅草の店に行ったり、松江・出雲・福岡・そして今は伊万里（一軒）である。

はりま釜の方の手打蕎麦を食べると母の味がして、母に会ったような気になるのである。

私が召集を受けた時、母は伊万里駅まで見送りに来たが、私の方を全く見なかった。懸命に涙をこらえている様子だった。大村の部隊まで私と一緒に行く父が側により、肩をそつとたたくと母は泣いた。生きて再び私と会うことはないだろうと思ったに違いない。

大村の宿では全く酒の飲めない父と私に、銚子一本が出された。二人は顔を見合わせ盃一杯ずつ顔をしかめて飲んだ。内心、別れの盃だと思った。

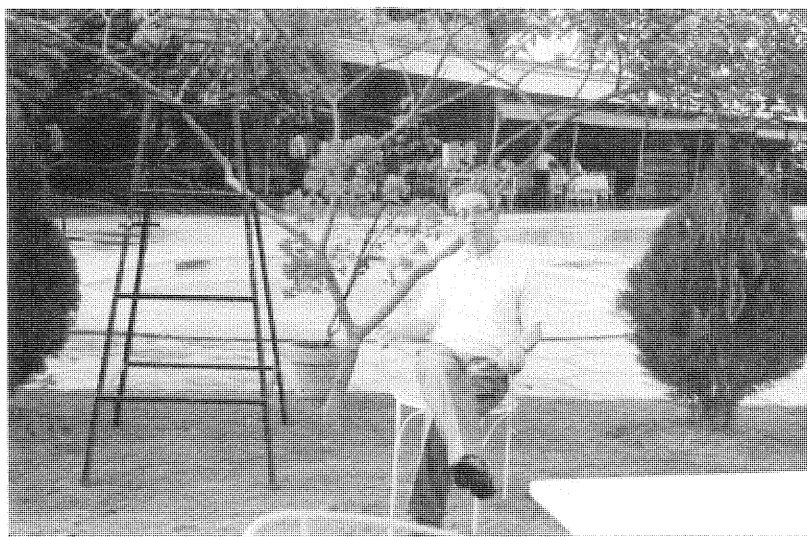
貧弱な体格の私が軍隊生活に堪えられるかどうか、父はそれが気になっている様子だった。

宇品港・門司港を起点として、パラオ・マニラ・ラバウル・基隆・高雄・台北と転々とした。昭和十八年八月十六日輸送船 帝海丸に乗船。船団を組み、南支那海を南下、九月二日比島セブ島に上陸。セブ島ではガダルカナル方面で壊滅した船舶部隊の再建をしていた船舶司令部の指揮下に入った。

マニラに次ぐ第二の都市セブ市は当時治安が悪く、外出は殆んどできなかった。比国の人々との交流は

少しはあつたが深入りはなかった。日本人は油断ができないという考えがあつたようだった。胃腸薬、包帯、タオルなどが欲しいので寄つて来る者はいた。

高雄に転進するまでの約五ヶ月間、幾度か危険なことではあつたが、私は運よく生き延びた。カルメラ焼の道具は、妻が大切に保管していると思うので近く焼いてみたいと思っている。さして遠くない日に二人の兄と同じように、寒椿の咲くあの地へ行くつもりである。



マニラ湾の夕日

いまさら、言うまでもないことだが、予定通りの人生なんてそうあるもんじやない。私の父はやりた
ことを山ほど残して、忽然と六十七歳であの世へ旅立った。

父が長年愛用した懐中時計が今、私の手許にある。

人生はここぞという時に決断しなければならないことがある。父は何かを決断する時、必ずこの時計を
取り出しじつと見つめた後、事を決めた。時刻を見ているのではなく独特のくせであった。

父が他界する前に聞いておけばよかったと思うことがいろいろあった。

息を引き取ったのは午前四時十五分だった。私はじつとしておれず、すれ違う人のいないほの暗い沿岸
の道を、涙が出るままに歩いた。葉を食いしばって悲しみをこらえながら歩き続けた。

幾ら考えても何の足しにもならない物思いだとわかっていても、辛かった。

人付き合いを大切にした父の姿勢を見習いたいと思う思った。

復員で両親のいる故郷に帰る時の心境は今でも忘れようもない。あの戦争の時代は遠くなくても、決して遠のくことのないさまじな記憶が私にはある。

復員の汽車の窓から偶然見た長い葬儀の列には私は驚いた。一人の人間が死んだ時このように大勢の人に大切に見送ってもらうことなど、全く忘れていた私だった。戦地では死んだら、ほったらかしが多かった。

栄養失調で死ぬのは玉に当たって死ぬより、残酷で悲惨なものであることも知らされた。やむを得ないものが、あったとも言えるが、多くの人が人間性を失っていった時代だった。わが家に着き、只今と言ったら驚いた父がはだして飛び出して来た。

「おぉー生きとったや、よかったーよう生きて帰れたねー、ほんとよかったー」と絞り出すような声で言った。母は

「お帰り」

と言つて目を赤くして、とつておきの白い米をとぎだした。

帰つてこないかもしれない息子を、どんな思いで待っていたのだろうか。

時代の流れの中で人間はどんどん変わっていくように思われる。時代はたしかに人間の考え方、行き方に変化をもたらす。

企業と社員、親と子、嫁と姑といった関係も昔のままではない。だが人間の内部、本音ということになると、何も変わっていないというのが真相だろう。どんな時代でも、親は子を気づかわざるを得ない。

仕事がなくお金がないと、人間の感情は荒れ、人間から優しさや思いやりや希望を奪っていく。

親に安定した収入があつて、何一つ不自由なく暮らしてきた若い世代の人がこれからはきついと思う。なぜなら切迫感のない生活を送ってきたから、何とかなるだろうという感覚が染み付いているから。

「自分のやりたい仕事にめぐり合わない」

「自分の本当の力を分かってもらえない」

とか本気で思っているのなら、どうしようもない。

生きていることに苦しみを感じている人もいる今の世の中である。

若者は若者らしい、中年は中年らしい、老人は老人らしい、仕事をしっかりとやっていきたいものである。

「命に関すること意外は、人生の大事とは言わない」

父が残したこの言葉に、私は幾度か助けられてやって来た。

多くの親しい人を喪った私は人生は寂しいもんだという思いがして来る。私より若くしてこの世を去って行く友人がいると本当に切ない気になる。

戦争は残酷である。老後の頼りにしている子どもが死地に行くのだから。親自身にはどうすることもできないものであった。

人前で涙を見せるのはみつともないという男の羞恥心を持っていた父だが、召集令状を持って来た時の

父の目は、少し赤かった。

息をのむほどの美しいマニラ湾の夕日を私は幾度も見た。世界的な景観といわれる夕日を見ては、故郷の両親を思った。

生きて帰るか、骨で帰るか、わからなかったが、できたら両親に元気な姿を見せたかった。

この夕日を共に見ながら涙した仲間のKは、疲れたような口調でこう言った。

「親より早く死ぬのは辛いよなあ」

マニラ湾に停泊することの多い、暁部隊だったので、船上や夕日の見える椰子の木陰で私はいろんなことを教えられた。同年兵のNから写真技術について徹底的に教育された。彼は写真のことになると人が変わったように厳しかった。

Fからは花札・トランプ・喧嘩の作法まで教えられた。

戦後、私は東南アジア各地を旅したが、この夕日を再度見たときの感動は、言葉にならないほど大きかった。

せめて二十五歳までは生きていたいと願った私だが、今年九十歳というところまで到達した。こんなに長生きするとは夢にも思わなかった。

あのマニラ湾の沈みゆく夕日に向かって、いつも手を合わせていた友らも今はもうこの世にいない。



別れの篠笛

秋がすぎ、初冬の寒気が島をしめつける季節となった。

時の流れというべきだろうか、かつての戦場を体験した世代は随分と減ってしまった。

この歳になると（九十歳）、友人や同年の知名人の訃報を多く聞くが、全く寂しいものである。多くの親しい人を喪った私は、人生は孤独だという想いを強く感じる。

朝日の天声人語欄に、日本人の平均寿命は、女性が八十六歳を超え、男性も八十歳に迫るとあった。だがその半数がその歳月を使い切らず生涯を終えるとあった。

何でもない別れと思っていたものが、永遠の別れとなってしまった場合もある。

去って行く者が自動車、汽車、あるいは飛行機だと、どこかあつさりしたものがある。だが船が出て行く時は実にゆつくりと港を離れて行く。

少し沖に出た船は、ゆるやかに向きを変える。急いで客室を通り抜け、反対側に走る。親や身内、友らが懸命に手を振っている。ポーツと汽笛を鳴らして船は速度を上げる。

こらえていた涙がぼろぼろこぼれる。

今でこそ、陸路で行けるが、当時の船での出発は「今生の別れ」を思わせるほど切なかったものである。かつての島の少年少女達の試練は、棧橋より始まったのである。

二度と棧橋を踏むこともなかった若者もいた。

別れといえ、忘れることのできない思い出がある。

昭和十九年十月十五日、輸送船(鴨緑丸)で基隆港を出発直前の早暁、突如、米海軍機動部隊の空襲を受け、瞬時に十八名の戦死者が出た。

若くして散った仲間の無念さを思い私は泣いた。

多くの人々の恩恵を受けながら生きて来た私、恩を受けたら必ず返す、という父の言葉を忘れてはいないのだが……

さして遠くない日に私は死ぬことは確実である。この歳になるまで長生きをしていると困ることもある。私ที่เขา界した時、葬儀の際にちゃんと挨拶をして呉れるであろうと思う人が、私より先にあの世へ旅立って行くのである。

「あんたのあの世の席は、ちゃんと取って置いてやるからな」

そう言って死んで行った友もいた。まさか地獄の席ではないだろうな、と一寸気になった。

かつての生死を共にした仲間も、今はもうこの世にいない。

いま頼りにしているのは、歴史ある寺の大僧正であるS師である。

ところが最近少し体調が悪く、心配している。

責任感の強い師であるから、やって来られるとは思うが。

いろいろ考えたが、三男の篠笛を聴きながら、“三途の川”（死者が冥土に行く途中、死出の山を越えてから渡る川、善人は橋を、軽い罪人は浅瀬を、悪人は深い所を渡するという）があれば渡って行きたいと思うようになった。それができたら私にとってこれ以上の喜びはない。

三男にとっては、悲しみの中の演奏である。辛いだろがやってもらいたいのである。

多忙の中を私の葬儀に参列の方々、音楽をやっていた私の上の兄が、涙してほめた三男の篠笛です。どうか私と一緒に聴いて下さい。

あとがき

父は、平成二十六年四月二十四日に、帰らぬ人となり、翌日の二十五日の通夜と二十六日の葬儀の際は、弟の篠笛を皆様方に聴いて頂きました。この理由は、最期の随想となった「別れの篠笛」にあるとおりであります。

篠笛と一緒に聴いて頂いた方々、また父が生前お世話になった皆様方に厚く御礼申し上げます。この小冊子が、皆様方の思い出を呼び起こす一つの切っ掛けになれば、幸いです。

平成二十六年七月

長男 木寺 佐和記



著者略歴

木寺 諭吉（きでら ゆきち）

大正 10 年 7 月 17 日、	長崎県北松浦郡福島町に生まれる
昭和 3 年 4 月 3 日、	長崎県北松浦郡福島尋常高等小学校（尋常科）入学
昭和 9 年 4 月 1 日、	福島尋常高等小学校（高等科）入学
昭和 11 年 4 月 7 日、	佐世保市立商業学校入学
昭和 14 年 3 月 20 日、	佐世保市立商業学校第参学年終了
昭和 15 年 5 月 6 日、	沖之山工業株式会社用度課勤務
昭和 16 年 9 月 17 日、	佐世保海軍工廠総務部勤務
昭和 17 年 5 月 1 日、	召集により陸軍に入隊（在籍のまま）
昭和 20 年 9 月 21 日、	召集解除復帰
昭和 20 年 12 月 1 日、	佐世保地方復員局管業部勤務
昭和 22 年 11 月 1 日、	佐世保船舶工業株式会社勤務
昭和 23 年 6 月 10 日、	長崎県北松浦郡福島村立福島小学校勤務（地方事務官）
昭和 24 年 9 月 22 日、	小川良子と結婚

昭和25年7月、長男、佐和記 誕生

昭和27年5月、次男、知記 誕生

昭和31年8月、三男、昌記 誕生

昭和52年4月1日、田平中学校勤務

昭和55年4月1日、福島小学校勤務

昭和57年3月31日、退職、以後、福島町で生活、この間、本冊子の元となった「文教いろは」に投稿等

平成26年4月24日、病没

九十三歳の詩^{うた}

平成二十六年 八月発行

著者

木寺 諭吉

発行者

木寺 諭吉

〒 848-0462

長崎県松浦市福島町
端免 67ノ1

編集・発行協力

木寺 佐和記・ゆみ

印刷・製本

(株) 渡辺青写真

九十三歳の詩^{うた}